

# 音楽の世界

## 目次

<b>論壇</b>	東日本大震災から3ヶ月を経て	深沢 亮子	2
<b>特集</b>	フランツ・リストの人と音楽		
	フランツ・リストの音楽再考	中嶋 恒雄	4
	リストの奏法とその背景	E. ザラフィアンツ他	10
<b>長期連載</b>			
	<b>音・雑記一ひなの里通信一</b> (39) . . . . .	狭間 壮	16
	<b>名曲喫茶の片隅から</b> (20) . . . . .	宮本 英世	18
	<b>音盤奇譚</b> (25) . . . . .	板倉 重雄	20
<b>報告</b>	第5回 ベートーヴェン・ヴァイオリン・ソナタ 演奏法レクチャー		22
<b>取材</b>	岡山潔氏の「TAMA 音楽フォーラム」	中島 洋一	24
<b>短期連載</b>			
	福島日記(1)	小西 徹郎	29
	明日の歌を 第三回 上野雄次氏に訊く (3)	橘川 琢	30
	現代音楽見聞記(5)	西 耕一	35
<b>◆コンサート・プログラム◆</b>			
	第24回 日本音楽舞踊会議ピアノ部会公演		
	~きらめく夏に~		36
<b>舞踊寸評</b>	全日本舞踊連合創立 35 周年記念公演		44
	CMDJ 会と会員の情報		45

ピアノ 深沢 亮子

3月11日、1000年に一度という規模の東日本大震災から早くも3ヶ月が経った。その日私はお茶の水の順天堂病院と音楽事務所の新演奏家協会での用事があり、済み次第展覧会を見る積りだったが割愛し、東急線で自由が丘の駅で降りた。午後2時40分過ぎのこと、駅前広場には大勢の人々がキャーと云い乍ら集まっていた。そこに着く迄は分からなかったがひどい揺れに驚き、早急にバスで自宅へ戻った。お留守番に来てくれていた友人は急いで駅へ向かったが、数時間待っても電車は動かず、再びこちらへ戻り、彼女は私の家に泊まることになった。私は展覧会行きを止めた為運良く電車で帰宅出来たが、その後多くの人達が何時間もかかって危険な状況の中、徒歩で家へ帰ったり事務所やどこかの施設で寝泊りをしたという話を聞いた。私の所では、本や玄関に飾ってあった花瓶が床に落ちこわれた程度で済んだが、TVを見ると大変な事が起きていた。M9以上の大地震、そして約10mを超える津波が東日本の海岸を襲い、アッという間に民家や大きな鉄筋コンクリートの建物や橋、車や船等が次々と波に持ってゆかれると云う、まさに悪夢の様な光景が眼に入って来た。そこでは沢山の尊い命が失われ、今も尚行方不明の方が大勢おられる。私は居ても立ってもいられない気持ちで、夜中にお菓子の箱を探し蓋に長方形の穴を空けた。13日に都内のホテルで「守中会」という親戚の会があり、今年は60人余りの人達が出席することになっていた。私はいつもそこでピアノの演奏をするのだが、弾く前に大震災の為の救援金の呼びかけをした所、数万円のお金が集まって、私の分も含め翌日「守中会」の名前で毎日新聞社東京社会事業団へ、亡くなられた方々へのご冥福と被災者の方々の一日も早い復興をお祈りし乍ら送金したら、すぐに丁寧なお礼状が届いた。この様な時、私達音楽家に出来ることはと云えば、やはり音楽を通じて世の中のお役に立ちたいという事ではないだろうか。私は日頃いろいろな所でチャリティーコンサートを行っているが、その様な機会が与えられる事に大きな喜びと幸せを感じる。私自身社会の一員なのだし、これからも微力乍ら自分に出来る事を考え行動してゆきたいと思う。



今年 F.Liszt の生誕 200 年だが、先日属啓成先生の手記「リストー 作品と生涯」という本を読んでいた。「1838 年、リストはヴェニスでブダペストが大洪水で災害を蒙ったニュースを知り、祖国救命の為ウィーンに直行し、6 回のコンサートを行い巨額の利を上げてブダペスト市に義捐することが出来、演奏として自作のエチュードが絶賛を浴びて拍手が止まなかった」と書かれてあった。又、L.v.Beethoven は 1812 年 42 才の夏、ボヘミアの保養地カールスバートにいたが、7 月 26 日、ウィーン近郊のバーデンで大火があった事を知り、8 月 6 日バーデンの人々の為にチャリティーコンサートを行った。自作のヴァイオリン・ソナタ等を演奏したと云う。かつて他にも同様の事を実行した人達がいたのかも知れないが、この 2 人の大作曲家兼ピアニストの精神的な考えと行為に対し共感と親しみを覚える。

話は戻るが、被災された方々が辛抱強く落ち着いていて、いつも感謝の気持ちを失わない態度は本当に素晴らしく、外国の人々の賞讃の的でもある。現地で大変な作業をしておられるボランティアの方々もとても立派だ。特に若い人達が自発的に自然な取組みで行動をしている姿に私は心を動かされ、明るい日本の未来を感じたものだ。大震災、津波に加えて福島原発の放射能という怖ろしく、かつ難題が次々と起き、この先どうなるのか見当もつかない状態が続いている。元に戻る迄に長い年月がかかると思うが、多くの方々の努力が実り、少しずつ良い方向へ進展する様、祈念している。更に、震災から少し時間が経ち、各々が現実に眼を向けた時、心身共に疲れが表れ、いろいろな症状の出る人も多いかと思われる。すでに少しずつ前向きに生活を始めた人々もいるが、中には愛する家族や家、仕事を失い、その上病気がちであったりする場合、うつ状態が起きるかもしれない。又、自ら被災者であり乍ら多くの人々の為に働いている町役場等の責任者の方々も疲労困憊、かなりの休養が必要だろうと思われる。その様な人達に対する心のケアがいかに大切である事か。問題は山積している。

(ふかさわ・りょうこ 本会 代表理事)



## フランツ・リストの音楽再考

作曲：中嶋 恒雄

今年はリストの生誕200年に当たるために、多くのコンサートが、彼の作品を取りあげている。しかし、それらのコンサートのプログラムを見るかぎり、ベートーヴェンやショパンなどに比べると、曲目が非常に少なく、限定されている。リストの人生を調べてみると、リスト自身の人生や音楽への想いと、今日の人々のリストへの評価は、かなりのずれがあると思う。そこでリスト自身は、どのような音楽家でありたかったのか、どうして今日の人々とのずれが生まれたのか、文献や楽譜を通して探してみよう。



### 1. リストの音楽への想いと評価のずれ

彼の作品の中で、演奏される機会が多く、人々に良く知られている作品は、19曲から成るハンガリー狂詩曲である。リストはハンガリー語を話せなかったが、ハンガリーの地に生まれ、生涯、自分をハンガリー人と考えていた。そこで20代の後半から死の前年に至るまで、マジャールや、ハンガリーの素材をもとにした曲を、何曲も作ったのである。リストは、ハンガリー狂詩曲という名のもとに、ハンガリーの歴史や、ハンガリー人の理想を、幻想的に表現することを意図した。19曲の中では、2番、15番が特に有名である。しかし、管弦楽曲としても知られている2番の素材は、実は他の音楽家が、ハンガリー風に作曲した曲の動機に依っている、という説がある。また15番（ラコーツィー行進曲）は、ハプスブルグの圧政に対するマジャール民族の哀歌として、1830年頃から歌い継がれてきた歌を素材として、作られている。要するにリストは、他の『パガニーニの主題による華麗なる変奏曲』や『ロッシーニの主題による---』などの曲と同じように、狂詩曲の主題の選択に当たっては、彼がハンガリー風と思う音楽的感性にのみ、従ったのである。しかし、当時の演奏家の一般的な演目である、与えられた主題の即興的なパラフレーズ以上の曲として、改訂を重ね十分に仕上げたために、バルトークをして、『形式と技法の観点からは完璧なもの』（『バルトーク音楽論集』お茶の水書房1992）と言わしめた、出来映えを示している。もっとも同時にバルトークは、「円熟

期の、美辞麗句を捨てた作品が持つ満足感を、与えてくれない」と非難もしているが、これは狂詩曲の作曲の意図からして、ないものねだりというものだろう。



ピアノに向かう13才のリスト

リストは言う。「天才とは、人間の魂に神の存在を啓示する力です。芸術を己れの利益や名声の手段としてではなく、人間を一つに結びつけ、共感できる力とみなすこと。それが、芸術家に課せられた課題です。ヴィルトゥージティーは手段であって、目的とならないことを望みます。貴族以上に、天才は義務を負っていることを忘れませんように」（福田弥著『リスト』音楽之友社2005）。このような自覚を持っていたリストが、何故、「喝采を要求してやまない」や「民族的な刻印も、内面的な力として作用せずに、色彩的な仮装となっている」（H.メルスマン『西洋音楽史』みすず書房1970）のように、酷評されるのだろうか。ここで当時描かれた戯画を、見てみよう。

ここではリストの眼差しが、鍵盤を見ずに、遠くに注がれている。そして次のような記述が、付けられる。「リストは彼の天才的な演奏を聴かせながら、友情に満ちた眼差しを聴衆に投げかけ、あちらこちらに微笑みの挨拶を送った。聴衆はみな魅了され、熱狂し、彼が立ち上がると、熱烈な拍手を浴びせた。男たちはブラヴォーと叫び続け、着飾った婦人たちは、花を投げた」（H. W・シュヴァープ『人間と音楽の歴史』音楽之友社1986）。このような熱狂を、コリン・ウイルソンは「現代の偶像的なポピュラー歌手の19世紀版」と（『コリン・ウイルソン音楽を語る』富山房1970）言うのであるが、こういう聴衆に囲まれていては、難解な音楽構造を持つ作品などが、好まれるはずはない。そこで、ワーグナーは言う。「もしリストが有名人でなかったら、いや、大衆が彼を有名人にしなかったら、大衆の奴隷、そして巨匠になる代わりに、小さな神とも言える存在になっただろう。大衆は、リストに珍しいもの、馬鹿げた手品のようなものを要求し、リストはそれを与えているのだ」（P.H.ラング『西洋文化と音楽下』音楽之友社1986）。恐らくリストは、音楽のもつ「人間を一つに結びつける力に奉仕する」という強迫観念に近い倫理的な信念のもとに、彼の音楽の聴衆を、広く求め過ぎたのだと思う。その結果は、早くも20代の若さで、「私はなぜここにおり、何をしようというのか。大衆の喝采が私に何をしてくれるのか。空虚で他愛ない祝福について自問している」（福

田弥著『リスト』音楽之友社2005)のような自らへの懷疑が生まれ、自他への不適應を、心の奥底に抱いたのである。

ところでリストの言う《天才》という術語を、ここで検討しておこう。天才という概念は、わが国や、お隣の中国にはない。その理由は天才概念が、15世紀のルネッサンスに始まり、18世紀のヨーロッパで成立した概念だからである。ルネッサンスまでの人間は、聖書が述べるように、神の創造物であった。しかし科学の進歩は、「神が世界を創造したとき、人間に地上の支配を委ねた。そこで地上の神である人間によって、歴史と文明を創造する業が実現されなければならない」(M. エリアーデ『世界宗教史』筑摩書房1991)というように、人間もまた神格を持つと、人々に思わせるようにしたのである。

リストが自身を、天才とみなしたかどうかは別にして、自身の高い能力を自覚し、人々の熱狂や崇拜の重荷を背負いながら、寛容と、品位と慎みをもって人々への責任を果たし続けたことは、リストがそれを、自分の使命と考えたからこそ出来たのだろう。洪水の被害に遇った祖国ハンガリーに、義捐(えん)演奏会を開いて多額の寄付をし、《団結のために》フリーメーソンの会員となり、貧困にあえぐ多数の人々への道徳的、知的、物質的な改善という社会思想を信奉して、精神病院や、牢獄にまで出かけて行く。30代前半でヴァイマルの宮廷楽長になってからは、多くの弟子を無料で教え、ワーグナー以下多くの後輩作曲家に励ましと援助を与える。そして晩年の17年間は、ブタペスト、ヴァイマル、ローマの3つの都市を行き来して、活動する。これでは、いかにリストが高い能力をもっていようと、体力的にも、音楽活動に支障を来たさないわけには行かなかっただろう。

## 2. ハンガリー狂詩曲の素材

ハンガリー狂詩曲には、さらにもうひとつの問題がある。リストが29歳と35歳の時にハンガリーで収集し、書き留めて作曲の素材とした旋律が、実は、ジプシー音楽家の演奏したものであった、ということである。当時、ジプシーの音楽家たちは、貴族や上流階級の人々が集まる場所で、お金のために、彼らの高い能力を披露した。リストが、もし農民たちの音楽を聞く機会を持ったとしても、そこでの農民は、貴族の館に呼び集められ、貴族の命令によって歌わされた者だったはずである。当然のことながら農民たちは、貴族たちの気に入るように、聞き覚えた上流社会の通俗歌を素朴に歌い、彼らの生活に密着した、本来の農民歌を歌うことなどは、決してなかった。このジプシーの音楽と農民たちの歌の比較から、リストは、ハンガリーの固有の民謡は、ジプシーの音楽である、と結論づけたのである。この結論

が誤りであったことは、その後のコダーイやバルトークの研究が、明らかにした。バルトークは述べる（『バルトーク音楽論集』お茶の水書房1992）。ハンガリーの民俗音楽には、2種類がある。素人作曲家たちによって作曲され、上流階級に広まった、単純な構造の都会の民俗音楽と、農民生活の中から、自然発生的に生まれ、伝播していった農村の民俗音楽であると。リストが書き留めたジプシーの旋律は、都会の民俗音楽を、ジプシー流に装飾して演奏したものだただのである。しかし、歴史は進歩し、発展すると考える19世紀の合理主義や階級意識、そして当時の学問の水準からは、リストが農村の民俗音楽に価値を見いだすことは、不可能だったであろう。そこでバルトークは、素材が価値あるものでなかっただけに、このハンガリー狂詩曲では、ゆっくりした部分の憂愁と、早い部分での激情の爆発の形式が、対照的な名人芸として展開されて、一般的な大衆の寵愛を、より多く得ることになったとさえ言っているのである。

### 3. リストの音楽の新しさとその再評価

このようにハンガリー狂詩曲が、一般的な大衆の寵愛を得た音楽だとするならば、音楽史的に意味のある玄人好みの作品には、何があるのか。ここでもバルトークは、公正な評価を下している。バルトークは完全な新しさを持った作品として、『ファウスト交響曲』などの幾つかを挙げているが、ここでは、だんだんとソナタが書かれなくなって来た時代に、あえてリストが作曲した、ただ一つのピアノ『ソナタ』を取り上げよう。このソナタは、長らく賛否両論に論じられたようであるが、先の『西洋文化と音楽』の著者P.H. ラングは、ベートーヴェンの最後のソナタハ短調に続くものと、位置づけている。それでは今日では名曲とされているものが、何故、作曲された当時は、否定的な意見が多く出されたのであろうか。

私たちが、音楽を聴いて理解するということは、今日までのさまざまな研究から、次のように考えてよい。例えば、野鳥の観察においては、観察者の経験の差によって、同じ場所でも鳥を発見出来たり、出来なかつたりする。これは観察者の脳に、経験や知識に基づく情報処理のための神経回路が出来ており、これによって予測をしながら、対象を観察するからである。音楽の場合も、同様である。人々はそれぞれの経験や知識に従い、脳に蓄えられた音楽情報を処理する神経回路を通して、音楽を聴く。音楽は、ある確率的規則に従って音素材から出来事を作り、それらの出来事を配列して音楽的時間を作る。そこで音楽を聴くものは、自分のもつ音楽情報処理回路の確率体系に照らしながら、音楽的な出来事を聴き、次に起きるべき音楽的な出来事の予測をする。ここでもし予測が全く当たらなければ、それは、その

音楽をまったく理解出来ないということであり、予測が全部当たるならば、その音楽は興味を惹かず、価値もない。従って、ある時代に流布する音楽というものは、ある時代の多くの聴衆の、平均的な情報処理神経回路の水準にあったもの、予測が当たったりはずれたりしながら、興味を持続できるものということができる。すでに述べたハンガリー狂詩曲は、当時の聴衆の音楽情報処理回路の水準に適合したために、あれほどの人気を勝ち得たのであり、バルトークのように一般人以上の音楽情報処理の神経回路を持つ者に対しては、音楽的な満足を与えないのも、当然なことなのである。

では『ソナタ』は、具体的にどういう作品なのであろう。当時の古典派、ロマン派音楽を構成する確率的規則の体系は、長短両音階の音度上に作られる3度堆積の3和音が、中心となる主和音から、順次5度下降しながら逸脱しつつ進行し、最後に再び、主和音に復帰するというものである。今日でもこの確率規則の体系は、ポピュラー音楽を始めとして、十分に有効なものである。しかし西洋音楽史は、このいわゆる機能と声法の体系を破壊するように進んだことを、後世の私たちは、よく理解している。

『ソナタ』の冒頭は、主調である口短調の属和音による主要な動機に達するまでに、ゆっくりした8小節の序奏を置いている。この序奏は、4分音符を主体に下降する2小節の動機が、1回目はハ短調の音階の中で、2回目は動機の中の2音を半音転位させ、増2度音程を2つ含むジプシー音階の中で、2回、繰り返されて作られる。しかしこれらの動機は、ショパンがこの曲より14年以前に作曲した変口短調ソナタの冒頭と同じように、属音を主音とする調の属和音、いわゆるドッペル・ドミナントの和音場に所属する。この和音場でのショパンは、序奏の動機をほんの2小節だけ、聴衆の耳を曲に向けさせるために冒頭に置いて、それを直ぐに、主和音の主題に進行する属音に解決させて、調性を確立した。これに対してリストは、14小節目の第3の動機が出現するまで、調性を確立せず、また、調性が確立しても、すぐに和音を半音階的に平行移動させ、調性を明確にするのは、何とようやく、32小節にもなってからなのである。これでは当時の多くの人の耳には、調性があるやふやで、音楽の自律的な論理をもたない楽曲として、理解されなかつたであろうことも、合点がいく。しかしリストの和声意識は、このソナタの作曲から20年後には、V・ダンディに「調性を抹殺したい」（V・ダンディ『作曲法講義第2下巻』）と述べたところを目指していたのだと思う。またさらに、リストが標題（プログラム）という手段によって、作曲家が聴き手の気ままな詩的解釈から作品を守り、作曲者の意図を明らかにすると表明したことも、誤解を助長したことであろう。ソナ



夕を理解出来ない聴衆たちは、ソナタが何らかの詩的プログラムに従って構成されていて、音楽的論理性をもたないものであるから、作曲者の説明がない以上は、理解出来ないのは曲が悪い、と考えたであろうからである。

今日の脳科学は、言語が、大脳新皮質における視覚、聴覚、および運動感覚の重なり合う部分に成立すると言う。そこで音楽の聴取能力を補うために、言語的な説明をしようと試みることは、人間の必然の傾向である。しかし、音楽する者は誰でも、音楽は音楽独自のものであって、言語的であろうと、視覚的であろうと、さらにまた運動感覚的であろうとも、それらの説明はすべて、解釈であり、比喩であることを知っている。リストがそれを知らないはずは、絶対がない。恐らくは文学的な類推が、彼の音楽発想を豊かにし、聴衆の聴取の助けにもなるということが、彼の意図であったのに違いない。何故ならば、立派なプログラムをもった交響詩『前奏曲』のような曲でさえも、しっかりとした自律的音楽論理をもって、作られているからである。問題は、当時の多くの聴取者が、ソナタを理解する情報処理の神経回路を持っていなかったこと、リストの発言が誤解を深めたことなのである。

リストは54歳のときに下級ではあるが正式な僧籍に入り、「生きている愛しき人々を光で照らし、亡くなった愛しき人々を、安らかに眠れるようにする。これが私の音楽が求めるものです」（福田弥著『リスト』／前掲書）という考えのもとに、作曲を続けた。しかし、「グランのパジリカの献堂式のための荘厳ミサ」のパリ初演において、多くの大衆とともに、友人のベルリオーズにまで酷評されたことは、彼の心が、大いに傷つけられることになった。そこで晩年のリストは、作品評価の望みを未来に託し、他人から好まれようとは思わずに、ただ作曲し続けるだけで十分という心境で、仕事を続けたのである。

リスト生誕200年に当たる今日においても、彼の宗教音楽などは、ほとんど演奏もされず、理解もされない。しかし、クラシック音楽芸術の確率的な論理が、リストが目指したような無調へと進み、遂にはその歴史的な発展を終えたと考えられている現在、音楽が何のためにあるか、音楽の社会的役割は何なのかという初心に戻り、もう一度、リストの栄光と諦念の人生と音楽を、検証してみる必要があるのである。

(なかじま・つねお 本会作曲会員)

ピアニスト・E. ザラフィアンツ氏によるレクチャー

## 「リストの奏法とその背景」

ピアノ部会主催 2011年5月3日

今年はリスト生誕200年、その頃のヨーロッパはどのような時代であったのか。ショパン、シューマン、リスト、ワーグナー等々、音楽家同志はどのような様にかかわり影響していたのか。ピアニストとして日本でも活躍中のロシア人、E. ザラフィアンツ氏に、リストの奏法とその時代の背景、ピアノの構造などについても話をうかがうことにした。ザラフィアンツ氏は少年の時から読書好きで、今も日本に滞在中は種々の本を求めて神田の古本街を探索している。氏は母国語の他、独、英、仏語を話す。日本、中国の漢詩の研究もしている。（経歴参照）

このレクチャーは 一柳富美子氏に通訳(ロシア語)をして頂き、ビデオに撮りそれを起こしたものである。文章としては疑問もあるが、演奏をしながらの説明や解釈は、氏の「意」を理解しつつ、読者にも納得が行く様に出席者と意見をかわして出来たものである。会場は本会員・齊藤寿美代氏(ザラフィアンツ氏のマネージャーとして14年前から支援しているピアニスト)のスタジオ。

文責 戸引小夜子

### エフゲニー・ザラフィアンツ 《プロフィール》

ロシアのノヴォシビルスク生まれ。音楽家の両親のもとで育ち八才から才能ある子供だけを教育するモスクワ音楽院附属中央音楽学校でエレナ・ホヴェンに師事。幼少より天才的な才能を発揮するが、青年の純粋さゆえに招いた不本意な出来事にあい、モスクワ音楽院への道が閉ざされるといふ悲劇を味わった。その後オルスク音楽院、グリーンカ音楽院、大学院で首席卒業後 当音楽院で教鞭をとる。



全ロシアコンクール、ポゴレリッチ国際音楽コンクールなどで入賞した後、ようやく演奏活動が始まる。97年来日後、各地で活発に活動が展開され、独奏、室内楽、コンツェルト、マスタークラスなどで大絶賛されている。

月刊誌「音楽の友」二十一世紀の名演奏家事典にて 世界の注目されるピアニスト70人に入るなど、聴衆の魂を揺さぶる精神性の高い演奏は益々感動を呼び、熱烈なファンを増やし続けている。現在、居をクロアチアに構え、ザグレブ国立音楽院で講師をしている。

## 1. メフィスト・ワルツ 第1番. 村の居酒屋での踊り 「ファウスト」からの2つのエピソードより

演奏・広瀬美紀子

演奏されたキャラクターは良いと思う。  
又、合理的な演奏である。美学的な局面から云うと、リストの演奏には危険をとまなう方が良い。

まずこのテーマはどこからきているのかという事からお話したい。それは中世ヨーロッパの伝説からきている。「ファウスト」は詩人のゲーテや16世紀のイギリスの文学者達もこれを題材に使っている有名な伝説であり、中世のドイツでも「神秘劇」の題材になっている。



<ザラフィアンツ氏、広瀬美紀子>

ファウストという科学者がいた。彼は若い頃から研究ばかりで何も楽しいことをせず、気が付いたら年をとっていた。彼は自分の若さを取り戻し、もう1度人生を楽しもうと計画した。ファウストは魔術も使うことが出来る学者であったから、それを使って地獄から悪魔・メフィストフェレスを呼び寄せた。(悪魔にもランクがあり、メフィストは上位のサタンではなく、下っ端の一人であった。) このメフィストを召使いにし、命令をする。“自分の魂をメフィストに渡す代わりに、好きな所に飛んでいかせ、ほしい物を手に入れさせろ”と。ゲーテによる物語の結末は、(メフィストとの契約によって)ファウストが満足し、「ただちに止めよ！」と云ったとき、彼が私欲ではなく人類のための素晴らしい楽園を生み出したことを神に認められ、天国に昇っていくという結末になっている。

ファウストは、リストにとっても、ヨーロッパ文化にとっても重要なテーマであった。ヨーロッパにおいては、「魂を売る」ということが良いか悪いかという事は、それを「神聖な罪」として肯定されることが多かった。真実を探求するファウスト、そしてメフィストとマルガリータはファウストの分身であると捉えられる。

### 1) メフィスト登場のところ

最初の所は、魔法でファウストがメフィストを呼び出している場面。最初は何もない所から炎が湧きたつ様に。5度の和音の重複は地獄の炎や魔術の呪いのようだ。一度は鎮まる。神秘的な儀式 ～ファウストがメフィストを呼ぶための～ は普通は3回行われるが、2度目、ここでメフィストが現れる。

次のリズム（※1）、このキャラクターは、本当はファウストのことを聞きたくないというメフィストの抵抗、傲慢さを現わしているのでアクセントを強調して。



※1

《ヨーロッパの神話について》

悪魔は最初は天使だった！天使が自分と神が同等と思う様になり、傲慢になって（キリスト教では傲慢が一番の罪である）、神によって地獄に落とされたのだ（墮天使という）。ファウストは人間の知識の限界を超えたものを求めている、悪魔的要素をも内包していたといえる。

※2 悪魔が空を飛ぶ音型

次の装飾的な上行フレーズは“空を飛ぶ事”を音にしている、この音型は大事である。また、空を飛ぶというのも悪魔の要素である。（※2）



## 2) 中間部・愛のテーマ

エロスとは、エロティックではなくロマン的な意味で「美しいものを追及しても到達できない事」がエロスとなる。美しい音楽に成し遂げられない事（気持ち）、幻想を現実に出来ない事、満足を得られない事をいう。

音楽で話すと、モーツァルト・シューベルトなどの時代はシンプルな美しさを極めた黄金時代であるが、美しさが段々複雑に重なってリストの時代になっていく。次にワーグナー・マーラー・スクリアビンへと続くが簡素の美しさが手の届かない所にってしまった。

愛のテーマは半音階的に変化していき、D 9 の和音はまるでスクリアビンの神秘和音に近い。2度上がって解決したかに思えるが両方とも不協和音…これがエロスなのである。（解決しないという事） また、当時ドイツの中心であったワーグナー（リストの親友であり後に娘がワーグナーと結婚して親族となる）に影響を受けた音型も重要である。

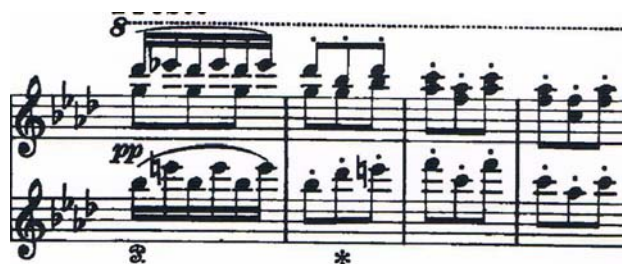
このようなユニークなテーマは、後期のスクリアビンやワーグナーと同様、驚くほど「甘美と毒」が一緒になっている。無垢で純粋な甘美はマルガリータ、毒はメフィスト。これがファウスト自身なのである。（肉体は若さを獲得したが、純粋無垢ではない）その所にエロスがある。

リストの若いときはヴィルトゥオーズ的な作品が多かったが、それだけでなくピアノという楽器の可能性を追求したので、その時代のピアノは飛躍的に発達した。また満たされぬ愛は単なるヴィルトゥオーゾに留まらず、内向的な意思の部分へと向かう。そのリストの姿は、ファウストがこの世の限りの神秘を追及したいという姿

と重なっている。ソナタ・ロ短調も高度なテクニックだけでなく内向的なところが多い。先ほども述べた通り、若い頃のリストはパッサージュが多かったが、後期は単なるテクニックだけでなくコラールの、祈り、グレゴリアン・チャントなど宗教的

なものに帰っている。（降誕祭のモミの木など）

装飾的音型は“ホタル”や“鬼火”の様に悪魔的要素がある。（※3）シェイクスピア、メンデルスゾーンも作品にしているが、夏至の夜に「魑魅魍魎」が出てくる様である。ノクターン（愛のテーマ）の合間にこうした悪魔的要素が出てくる意味も理解すると、イメージが湧くのでは。



※3 鬼火を表す音型

3) もとの炎が出てくる。バスのメロディと右のアルペジオパッセージは、幻想（ある意味では亡霊など）が飛び交う夜の情景が描かれている。p とはあるが思い切って弾いてもよい。

オクターヴの跳躍は魔法使いがホウキに乗って飛んでいるように弾きたい。魔女が集まる夜会の日をシャバーシャ（聖ヨハネの日、禿山の一晩、黒ミサ）という。

この曲の根底にあるものは、美しいものが最上であり善悪は二の次である。ロマン的には、新しいもの・危険を冒す事は英雄的でありヒーローなのである。これはシューマンにおいても顕著である。ファウストの愛とは、メフィストの手を経た悪魔的な愛であり、夜は永遠で太陽は死に等しい…

## 2. 3つの演奏会用エチュードより 「ため息」 演奏・戸引小夜子

この曲はショパンと同じように、エチュードではなく題名のある音楽作品になっている。手の交換で弾くという課題はあるが、練習曲ではないのでテクニックな課題を課すのではなくヴィルトゥオーゾ的に弾くことが必要である。

タイトルの「ため息」には、ガッカリではなくいろいろな意味がある。気持ちが高まって出る「ため息」もあるが、この曲は牧歌的（パストラール）な感じがする。

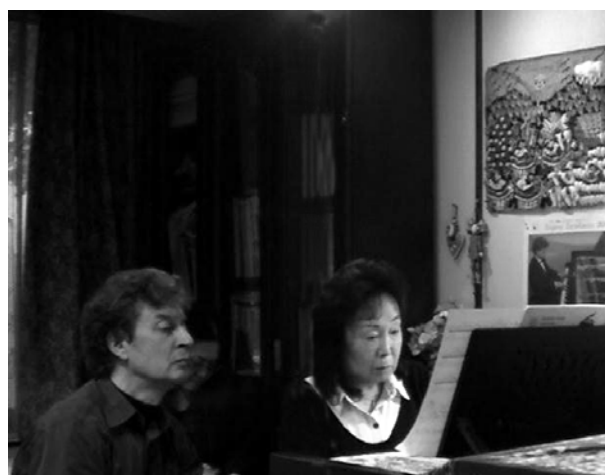
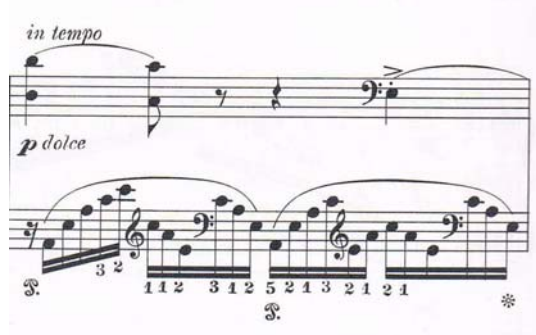


どの言語にもあるが、嘆息の「嘆」は感嘆、素晴らしいの意味と、すごい、つらい、泣くという意味もある。同様に「すごい」という言葉も全く逆の意味をもつ。すごい=ひどい、すごい=すばらしい、など。きちんと弾くだけでなく温かなキャラクターを考えて。例えばメロディーを少し遅くするレシタティーボの所はたっぷり瞑想的に、魅惑的・神秘的に謎めいて。

穏やかな背景をこわさない為には、ペダルをギリギリまで変えない事。この時代はまだペダルの機能については新しい時代であった（ベートーヴェンの時代でペダルがつく）ので、ハーモニーが完全に变化した時以外は踏みかえないでそのオーラを楽しんでいた。とくに解決のときは踏み変えるが、そうでないときはギリギリまで変えずに済む妥協点を探す。

＜ザラフィアンツ氏、戸引小夜子＞

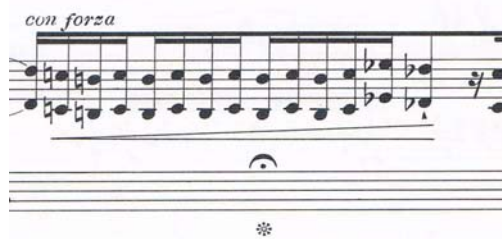
※ここからのメロディーはチェロの様に



古典では、ピアノの中音に響きを持っていき低音は離れた音でいくが、ブラームスなどはバスにも詰まった和音を使い“重さ”を強調した。これは好みだけでなく尋常ではない“苦さ”を伝えるためでもある。

ただ穏やかではなく、謎めいて神秘的に。ハーモニーが変わると融解して自然界の美の一部にとけてだんだん消えていくように。例えば最後の部分、66小節、Desからのバス音は1ページかけて落ちていく効果を考える。このハーモニー変化はドビュッシー・ラヴェルへの次の時代（印象派）を連想させる。最後のコラール～祈りは、晩年の作品と同様に、教会の中の様に。神を讃える宗教的なため息ともいえる。

そうかと思うとコンフリクトな対立もある。中間部（30小節～）は規模は小さいがドラマチックである。2ページにも満たないが、ドラマチズム（緊張感）が大切である。オクターヴは右手1つで弾くのがよいだろう。（※4）



※4 この音型は右手で弾くのがよい

カデンツァやレシタティーボの要素からきている部分は、うまく組み込んで異質にならないように。こうした悲愴的な部分はベートーヴェンの影響だろうか。

テーマと和音のバランスは巨人（神話のシンボル）の歩み、または大岩が動いているかの様に重く。これはリストにとっても実験的であり、これを強調すべきである。弾く時には時間を計算してバランスを考える。

38小節からクレッシェンドして45小節の1拍目はD9の和音で予期されない瞬間があり（※5）、これを強調する。道が寸断される様に。論理的に切れるのである。その後は同じハーモニーで続く。

後半は2度に入った和音もあり、最後にだんだん弱くなり、カテドラルの中で響いているように終わる。

※5 予期されない瞬間



<通訳の一柳富美子氏、ザラフィアンツ氏>



なお、ザラフィアンツ氏は、本年、以下のような公演に出演を予定しておいでですので文末を借りてご紹介します。

9月10日(土) けやき平和チャリティコンサート・ゲスト出演

(ピアノソロと大合唱「土の歌」全曲伴奏) 【府中の森芸術劇場どりーむホール 13:30】

10月2日(土) 西松浦味子メゾソプラノリサイタル

ピアノ：ザラフィアンツ【音楽の友ホール 17:00】

12月12日(月) エフゲニー・ザラフィアンツ ピアノリサイタル

【東京文化会館小ホール 19:00】

## 映画音楽をめぐる

## —コンサート・世界を旅する映画音楽—

無声映画を活動弁士の語りで見た。つい最近のことだ。徳富蘆花原作「不如帰」。画面に合わせて語る弁士の語りの面白さに引きこまれた。

その昔、この語りに小編成の楽団が音楽を重ねて画面を盛り上げていた。年輩者から聞いた話だ。語りに音楽を加えたら、それは更に魅力を増したに違いない。

リバイバルでの機会があれば見てみたいと思う。ドタバタ喜劇などでは「天国と地獄」の序曲が流れたのだろうか。無声映画を見ながら自分なりにその場面にあてはめて音楽を思い描くのも、楽しい試みかもしれないと考えたりする。

発声映画（トーキー）になってから、音楽は重要な要素となった。映画の内容は忘れても、音楽は耳に残っていると、時にはその映画を見ていなくとも、テーマの音楽は知っているということもあったりする。映画技術の進歩は演劇などの「鳴り物」とは別の映画音楽の分野を創りだした。

その映画音楽について、映画コラムニストの合木こずえさんの文章から一部を引く。「一流の映画監督は、頭の中で絵コンテを描きながら、すでにイメージした音楽をつけているという。その根底にあるものは、たいていクラシックの名曲だ。それをもとに音楽家がオリジナル曲を作る。こうして異国で生まれた古（いにしえ）の楽曲が、現代人にアレンジされて映像に溶け込み、後世へ受け継がれてゆく。映画音楽は実に壮大な叙事詩だ。」

名作映画をその中で使われた音楽を糸口に案内するコンサートを企画した。題して「世界を旅する映画音楽」。作品解説を合

木さんが、演奏は私どもの音楽仲間というもの。

チャップリンの「ライムライト」や、最近の日本映画「Always 3丁目の夕日」など15作品を選んだ。

「Always 3丁目の夕日」の日本を発って「シャイン」・オーストラリアを経て、南米、北米、ヨーロッパをめぐる、「砂の器」で日本に帰る。舞台を世界にざっと一周する映画とその音楽の旅である。

さて、私ときたら15作のうち、4作品しか見ていない。出演者の一人として全部見ておかねばならない。DVDをとり寄せ鑑賞ということになった。

思い起こせば若い頃から、あまり映画を見ていない。興味のあることがいろいろあって、映画にまで時間と小遣いがまわらなかったのだ。それにもう一つ、友人の語った言葉でブレーキをかけられたことも少しはあって。

それは、「学生にとって学問の敵は、3Sだ」というもの。①Sport、②Screen、③Sexの頭文字をとって「3S」。日本人愚民化のアメリカ占領軍の策略でもある、と。アメリカ映画にはやたらに暴力とセックスシーンが多いだろ？と言うのだった。そう言われてもあまり見てないので、否定も肯定もできなかったが、学問の敵！という枷（かせ）をはめられた感じであった。

今さらながら、若い時に見ておけば良かった、の後悔がないではないが。今だから面白く見られるのかもしれないとも思う。

DVDで映画を見終える。そして、映画の中の音楽にあらためて思いをめぐらす。ストーリーを追っている意識の下にもぐり



こみ、画面に奥行と陰影を作り出す役割と魅力について。

映画の中のその音楽だけが、人口に膾炙(かいしゃ)しているというものも結構ある。チャップリンの「ライムライト」のテーマ曲もその一曲だろう。せつなく胸にせまる音楽だ。映画を離れて一人歩きしているそんな名曲も、その画面に戻して鑑賞するとより楽しくなるのではないかと思う。



「カサブランカ」イラスト・つのだちひろ

数少ない若い頃に見た映画に「カサブランカ」がある。1942年に製作されたものを20年後に見たのだ。音楽は「ラマルセイエーズ」など各場面印象に残っているが、その中から「時の経つまま」を今回演奏曲にした。

しかし若い頃の私には音楽より、主人公のちょっとキザなセリフにしばれていた。それは女性との次のやりとりだ。女「昨日

はどこへ？」男「そんな昔のことは覚えてない」。女「今夜、時間ある？」男「そんな先のことは分からない」。あらためてDVDで確認した、いやキザですね。

一度は言ってみたいものだとはたためていたのだけれど、使えぬままに前期高齢者になってしまった。しかし、もし今頃言ってみればおそらく、「昨日のこと覚えてないですって？今夜の予定も分からない？それってボケちゃってるのよ！」などと身も蓋もないことを言われるのがおちであろう。

話がずれてしまった。ともあれコンサートは喜ばれて、シリーズへのリクエストが多数寄せられている。

今、思い出される映画がある。グレゴリー・ペック主演の「渚にて」だ。第3次世界大戦(核戦争)によって世界中に放射能汚染が広がり、オーストラリアの一部を除き人類が死滅するというもの。やがては死を迎える残された人々の、今わの際(きわ)が描かれる。1959年、今から52年前に製作された。

この映画の全編にわたり流れるテーマがある。オーストラリアの民謡「ワルツィングマチルダ」だ。悲喜こもごもの場面にあの手この手で効果的に使われている。

核戦争でなくとも、原発で人類は危機を迎えるのではないか。「渚にて」上映後、スリーマイル、チェルノブイリ、福島と原発の事故が続いた。悲しみと怒りの「ワルツィングマチルダ」が聞こえてくる。今、この時。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。





〔第 20 回〕 ギャンブル好きな作曲家

ギャンブル（賭けごと）というと、一般的にはのめり込んで働かなくなってしまった人とか、身をもち崩して悲惨な生活をしている人などが思い浮かんで、どちらかというとマイナスのイメージが強い。時に大金を当てた人のことが話題になっても、まあ自分には縁のない「幸福な人だ」ぐらいにしか思わない人が多いのではなかろうか。

しかし大小を別にすれば、何かに賭ける、試してみたいという好奇心は誰にもある。血液型を気にし、占いを信じるのも、その裏返し。人間の力を超える何かがあると信じるからこそ、そこに興味をもち、期待したり賭けたくなるのだろう。思えば私たちの人生だって、賭けに似たところがなくはない。「運命がカードをまぜ、私たちが勝負する（ショーペンハウエル）」とか「人生とは、切符を買って軌道上の車に乗る人には、わからないものである（モーム）」なんて言葉もあるように、誰にもわからないところ、どこかで賭けなければならない場面があるからこそ、おもしろいのかも知れない。

人生における賭けはともかく、遊びや娯楽としてのギャンブルといえ、作曲家たちの中にも、好きだったと思われる人物が何人かいる。まとめて挙げてみるなら、ニコロ・パガニーニ（1782～1840、イタリア）、チャイコフスキー（既出）、リヒアルト・シュトラウス（1864～1949、ドイツ）、ジ

ュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901、イタリア）、モーツァルト（既出）ら、である。

パガニーニは、18 世紀末から 19 世紀にかけて、ヨーロッパ中を席卷した超人的ヴァイオリニスト。私たちにはヴァイオリン協奏曲第 1、2 番、「24 のカプリース」などでなじみ深い、ギャンブル好きは 10 代からといわれている。それは、ほとんど独学で身につけたといわれる超人的技巧によって、17 才頃から大人顔負けの高収入を得たことが原因になっている。美食・酒・女・ギャンブルと、こちらも大人並みに早くから覚えてしまったらしいが、ギャンブルに関しては、こんなエピソードを残しているのである。



商売道具であるヴァイオリンには「キャノン」と呼ばれる銘器を使っていたのだが、それはある時、演奏会前にやったギャンブルに負けて大事なヴァイオリンを取られてしまったのを、一人の蒐集家が気の毒がって贈ってくれたものだといっているのである。と

ころがその後、この銘器も借金清算のために売り払おうとしたことがあり、「その前に、最後の賭けを」とやった勝負に勝って、危うく売り払わずに済んだのだと伝えられている。

また、死の三年前には、パリにカジノをつくり、そこで彼の演奏も聴かせようという話に乗せられて、大金を出資したが実際には欺され、法律上の責任者として責められた末にパリを逃げ出し、各地を転々としたという話も残されている。よほどギャンブルに魅入られていたものらしい。



これに比べると、チャイコフスキー、R. シュトラウス、ヴェルディの場合は、いたって健康的。ともに大好きだったのはトランプで、賭けるといっても家庭内や友人たちとの

遊びのようなものだったらしい。特に「スカート」というゲームが好きだったR. シュ

トラウスは、1923年に書いた歌劇「インテルメッツォ」（自身の家庭のようすを描いた作品）の中にこれに興じる場面を挿入し、チャイコフスキーもカードをめぐるドラマチックな歌劇「スペードの女王」（1890年）を作曲している。

真相がはっきりせず、学者間でも論争が絶えないのはモーツァルトのギャンブル好きである。これは彼がウィーンへ出て（1781年）独立した作曲家となった時代の話だが、特にその晩年に借金申込みの手紙を数多く書いたことから、かなりの高収入を得ていたにもかかわらず、それほどの困窮ぶりを見せたのは何故か？という研究から浮上したもの。

ハンブルクの音楽学者ウーヴェ・クレマーは、当時のモーツァルトの収入と支出を調べた結果、ギャンブルにのめり込んでいたためと推測しているが、なるほど当時のヨーロッパでは、日常的な娯楽の一つであったことが確か。音楽家たちが多少とも夢中になっても、決してふしぎではないだろう。（ポーランドのヴィエニャフスキーにも、ギャンブル好きの噂がある）。

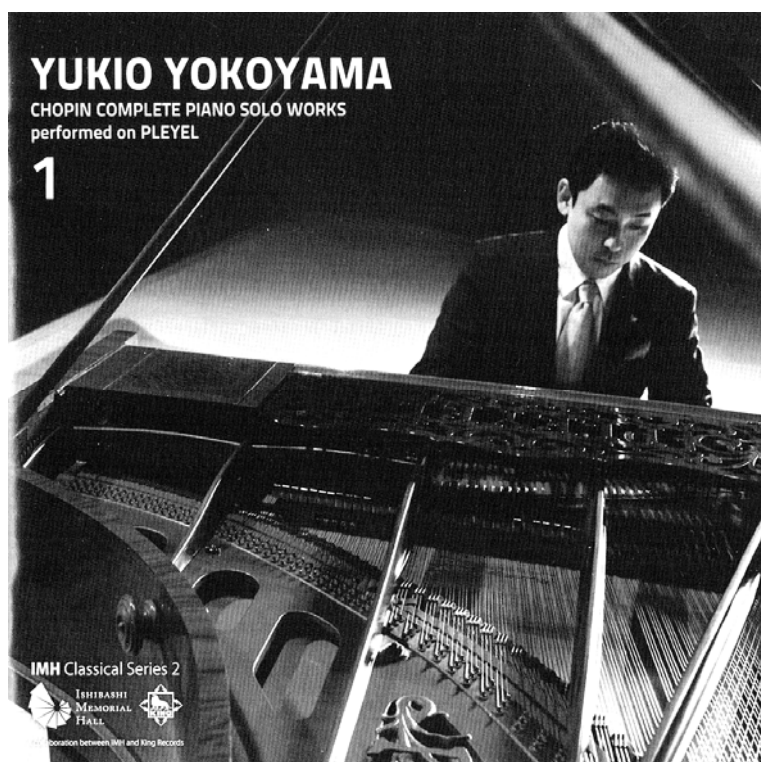
---

**【宮本英世氏プロフィール】**1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



## YUKIO PLAYS TOKIO CHOPIN

2010 年の横山幸雄さんの「ショパン・ピアノソロ全 166 曲コンサート」、そして未出版曲を加えて今年再挑戦した「全 212 曲完全奏破コンサート」は、壮大な企画であると同時に、演奏者、聴衆双方にとって新たな発見の多い、素晴らしい芸術的成果を挙げたコンサートだった。横山さんは「一日でショパンの全作品を弾くことで見えてくるものがある」という趣旨の発言以外、多くを語らなかったが、私にとっては 3 つの大きな発見があった。



ひとつはショパンの作品が、四部構成で作曲年代順に弾かれたことにより、作風の変化が手に取るように伝わってきたこと。直感的に結びついたのは吉田松陰が獄中で書いた遺言「留魂録」。「人間には春夏秋冬がある。10 歳で死ぬ者には 10 歳の中で四季があり、30 歳には 30 歳、50 歳には 50 歳の四季がある」（筆者要約）。まさに作曲年代順四部構成は、ショパン 39 歳の人生の四季を映していた。

二つ目はセットで出版された曲を「組曲」として演奏したこと。

例えば、あの無邪気な「小犬のワルツ」作品 64-1 は、なぜ晩年の産物なのか？ 作品 64 の続く 2 曲—嬰ハ短調の物憂さ、変イ長調の死の匂い—を合わせて聴くと、ああ、あの曲は幸せな日々の追憶だったのか、と直観的に理解することができた。

そして三つ目はピアニスト、横山幸雄さんの驚くべき実力。柔らかに漂う弱音から燦然と輝く強音まで表現の幅が実に広く、ショパンの作風の変化—エネルギーに満ちた初期から内容が深化する晩年—を巧みに弾き分けていた。ショパン全作品と向き合って得た膨大な情報量と経験、研ぎ澄まされた演奏技術と感性に裏打ちされた横山さんの演奏を聴いていて感じたのは、ショパンの本質を浮き彫りにしただけでなく、現代の日本、平成以降の東京の美意識が強く反映していたこと。タケミ

ツ・メモリアルにはフランス風でもポーランド風でもない、堂々と世界に誇れる東京のショパンが鳴り響いていた。

●プレイエルによるショパン・ピアノ独奏曲全曲集 1 (写真 前ページ)

横山幸雄 (ピアノ) [キング KICC913]

2010年10月録音。上野学園大学の教授を務める横山さんが同学園・石橋メモリアルホールで行っているショパン・ピアノ独奏曲全曲演奏会と連動して録音したCD。全12枚の予定で、現在第6集まで発売されている。この第1集にはショパンの初期作品、ロンド ハ短調作品1、ピアノ・ソナタ第1番ハ短調作品4、12の練習曲作品10が収録されている。文中の演奏会ではスタインウェイを弾いたが、ここでは1910年製のプレイエルを弾いている。ただし、古いピアノの音のイメージはなく、タケミツ・メモリアルで聴いたのと同じ燦然と輝くような響きである。やはり現代の東京が強く感じられる響きであり、演奏である。

●プレイエルによるショパン・ピアノ独奏曲全曲集 6

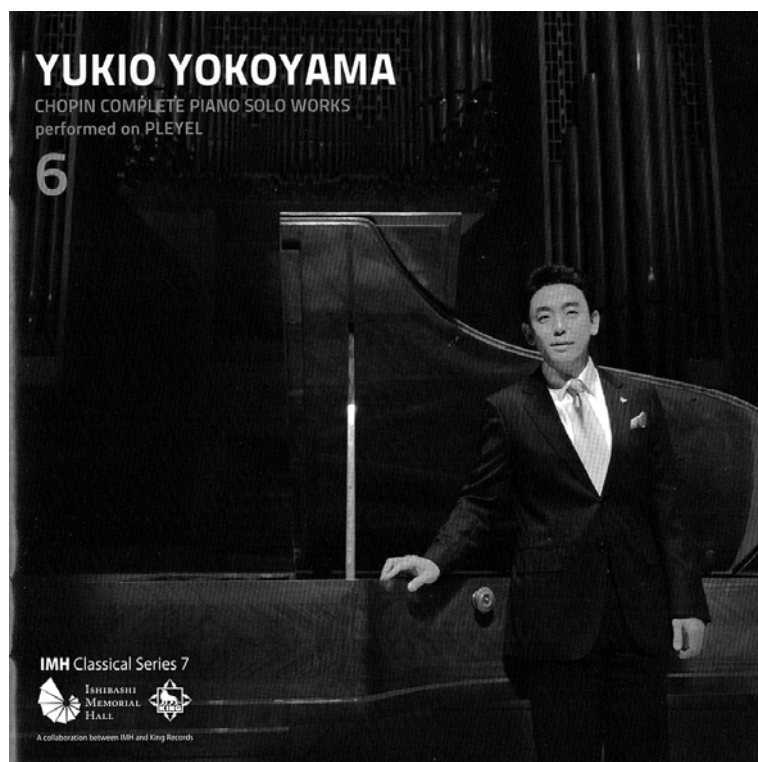
横山幸雄 (ピアノ)

[キング KICC913]

2011年3月録音。パリ時代初期の遺作のマズルカ5曲(1832~35年作曲)、4つのマズルカ作品17、4つのマズルカ作品24、12の練習曲作品25を収録。ショパンの「夏」にあたる時期の作品が集められている。通常、練習曲集として1枚に収録されることが多い作品10と作品25だが、作曲年代順の収録のため第1集と第6集に分けられている。

※東京(TOKYO)の英語表記について

TOKIO外国人が東京を発音するときに近い表記で、東京海上日動火災保険などは英語表記をTOKIOで始めています。私はYUKIOとTOKIOのごろ合わせの意味もあり使用しました。



【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」(アルファベータ)を上梓。



## 報告 第5回 ベートーヴェン・ヴァイオリン・ソナタ 演奏法レクチャー

対象作品：第7番 Op. 30-2 全楽章  
講師：北川 靖子（ヴァイオリン）  
北川 暁子（ピアノ）  
ピアニスト：亀井 奈緒美  
2011・6・21（火）  
北川靖子スタジオにて・出席者10名

講師：北川暁子氏 はじめに。

この第7番ソナタ、Op. 30-2について。

全体的にこの曲は音が多くむずかしい。音型をよく整理して何が必要で、何が必要でないかを考えてから弾くこと。（自分が出て行って良い場面か、そうでないかを見極める）ピアノとヴァイオリンが5分5分で良いが、リズムを合わせ過ぎないことと、余り深刻でなく。また、同時代のベートーヴェンのピアノ・ソナタ作品と合わせて考えるとその奏法、音型、リズム等を早く理解することが出来るのでは。例えば

Op. 31-1 G dur  
31-2 A dur  
31-3 Es dur など。

1800年以後難度の高い曲を作った時代の作品を弾いてみる。

亀井さん（ピアノ）と靖子氏（ヴァイオリン）による演奏。

### 第1楽章 Allegro con brio

ピアノが2旋律、ヴァイオリンが1旋律で3本の線が音楽を奏でているのでヴァイオリンとピアノのバスの動きが大事であるので左を意識して弾く。

ピアノだけの最初の8小節は緊張感をもったpで、休符の部分も休みではなく緊張を保って。9小節からの細かい16音符は指ではなく手首で弾く。20～21小節への右から左への動きは意識して受け継ぐ。フレーズをよく見て、次のフレーズへは新しく呼吸を取ること。シンコペーションは後の音を軽く（107、108）、拍の裏になっている音は余り出さないで（113、117）、小節の後半でTempoを上げて自分を追い込み、次を苦しくさせている箇所があるので気を付ける。

### 第2楽章 Adagio cantabile

2分の2の拍子を終止保って4拍子にならないで。cresc、の後のsp（35～36）に注意。ペダルはポイントに使うだけで、使いすぎない様に。60～68、107～112小節までは拍感をもって。

### 第3楽章 Scherzo Allegro

全てアウフタクトで出ているので拍を意識して。



#### 第4楽章 Finale Allegro

2分の2で、出だし、2つずつの音のフレーズを生かして。

スタカートは手全体を使って弾くと音がそろわないのでは。21小節の左のレガートは指使いを考える。29小節からの左のバスは下に飛ぶときに肘でとぶ。伴奏に際してペダルは余り使用しないで。

282小節からの *presto* は拍感をもって、しかし急がないで。

326小節までは *ff* であるが、最後の2小節はただの *f* であるので少し軽く弾く。

この後、レクチャー参加者10名からの質問などがあり、コンサートの時にはどの様に息を合わせるか、音をコントロールするにはどの様な奏法が良いか、等々懇談が続いた。

文責 戸引 小夜子

# 音楽現代

2011年7月号 定価 840円

## ♪特集1 名演のレガシー

～往年の名演奏家が遺した歴史的な名演ベスト10

## ♪特集2 北欧の音楽

～その作曲家と作品、風土と人間、そして魅力

## ♪短期連載 『つながれ心、つながれ力』

～東日本大震災と東北音楽界

## ♪特別レポート ニューヨークの小澤征爾&サイトウ・キネン・オーケストラ

## ♪カラー口絵

・ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン

「熱狂の日」音楽祭 2011

・ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン 2011 金沢

・日本演奏連盟 第23回クラシックフェスティバル

～フランツ・リストと同時代の巨匠たち

(リスト生誕200年記念)

## ♪インタビュー

後藤一宏 クリスティアン・ハンマー

西村 朗+井阪紘 清水和音 下野竜也

中井恒仁+武田美和子

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL3861-2159



演奏する北川靖子さん(VI.)と亀井奈緒美さん(P)



説明する北川暁子さん(中央)

## 取材 音楽文化活動紹介

### 岡山潔氏の「TAMA 音楽フォーラム」 文：中島洋一

TAMA 音楽フォーラムはヴァイオリニストの岡山潔氏（東京藝術大学名誉教授）が中心となり、若手演奏家育成を目的に立ち上げた音楽のプロジェクトです。岡山氏が自費を投じて、新しく町田市玉川学園に完成したスタジオ・コンチェルティーノにおいて、今年4月から、毎月1回のセミナーと、若手の演奏家によるコンサートが開催されておりますが、6月5日（日）のセミナーと、18日のコンサートを取材してまいりました。スタジオは二階建てで客席が50～60席ほどで、室内楽の演奏と鑑賞用としては、ほどよい空間です。お客は両日とも満席でした。

6月5日（日）の3時から開催されたセミナーには、栗栖麻衣子さん（ピアノ会員）と私の二人で、6月18日の「若手演奏家によるコンサート」には、私一人が取材に伺いました。このセミナーは、公開レッスンの場合は、受講生は公募で選ばれますが、音楽を学ぶ者のために受講料は無料という配慮がなされています。



岡山潔氏（右）と前田昭雄氏（左）

6月5日のセミナーでは公開レッスンはなく、『モーツァルトとブルックナーの弦楽五重奏曲』のテーマにより、演奏とレクチャーで構成されており、W.A.モーツァルト：弦楽五重奏曲 ハ長調 K.515/A.ブルックナー：弦楽五重奏曲 ヘ長調 W.A.B.112 / 同：間奏曲 二短調 W.A.B.113 が、岡山弦楽四重奏団（岡山潔=1<sub>st</sub>.V1、服部芳子=2<sub>nd</sub>.V1、佐々木亮=1<sub>st</sub>.Va、河野文昭=Vc）に大野かおる（2<sub>nd</sub>.Va）を加えたメンバーで演奏されました。

モーツァルトの演奏も素敵でしたが、この日の圧巻はブルックナーの弦楽五重奏曲で、深い内面性を感じさせる演奏でした。前田昭雄氏のレクチャーも、ブルックナーの人となりから、作曲技法にまで踏み込んでおり、専門的でありながら説明が判りやすく、その後の演奏をより興味深いものとしておりました。

18日（土）は3時から、TAMA 音楽フォーラム 若手演奏家シリーズ第1回で、長尾春花（V1）と川口成彦（Pf）で、モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ ハ長調 K.303/J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ ハ長調 BWV1005/フォーレ：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ長調が演奏されました。二人ともまだ東京芸術大学4年に在学中ですが、長尾さんの演奏は、昨年12月の『麦の会』のコンサートでも聴いております。楽器は1750年代のニコラ・ガリアーノということでしたが、明



るく美しい音色で奏でるその音楽は、若々しくそして瑞々しく、この半年間でさらなる成長を感じさせてくれましたし、川口君のピアノも、相手との呼吸やバランスについて繊細な気遣いを感じさせる好演でした。

なお、アンコールとして、愛らしい二つの小品、フォーレの「子守唄」とパラディスの「シシリアーノ」が演奏されました。

終演後、しばらくして、お客様が帰った後、5日には都合で出来なかった、インタビューを行いました。その内容を要約して掲載します。

中島：まず若い人たちから、伺いましょう。今日は本プログラムで3曲おひきになったわけですが、それぞれの曲をどんな想いで演奏されましたか？

長尾：先生からモーツァルトは天から降ってくる芸術、ベートーヴェンは自分で天に昇って行く芸術というアドバイスを受けていたので、全ての音の要素が天から降ってくるようなイメージを抱いて演奏しました。バッハは祈りの想いをこめて演奏しました。フォーレ



終演後の長尾春花さん（左）と川口成彦君

は、初めての挑戦だったのですが、フォーレ独特の空気というものを意識して演奏したつもりです。ブラームスみたいだと言っていた人もいましたが。

中島：まだお若いのだから、いまはあまりそういうことを気にしすぎずに、自分の情念の趣くままに演奏してみてもよいのではないかと思います。次に川口君に伺いましょう。貴男は、モーツァルト時代のレプリカをお弾きになったとお聞きしましたが、実は私も弾かせてもらったことがあるのですよ。音色や強弱表現が今のピアノとは随分違いますね。それを使ってアンサンブルを試してみたらどうでしょうか。

川口：実は、モダンピアノで合わせる前に、長尾さんとバルトーのレプリカであわせてみました。金属を使っていないので、ヴァイオリンととても良く溶けあう感じがしました。フォルテピアノ（18世紀のピアノ）だと、思い切り *f* で弾いてもそんなに大きな音はしないんですね。フォルテピアノで感じた音のイメージをモダンピアノでも表現してみようと色々工夫してみました。

この後、音楽談義、人生談義が長く続いたのですが、本来聞き役に廻るべき私が喋りすぎて、若い方々を辟易とさせてしまったのではないかと、後になって心配しました。ともあれ、感性豊かな若い音楽家と語り合うことが出来、私にとってはこの上ない幸せな一時を過ごすことができました。

その後、岡山潔氏にインタビューしました。

中島：このような立派な建物をお造りになって、結構お金がかかったでしょうが（笑い）TAMA 音楽フォーラムを始められた目的をお聞かせください。

岡山：私はいままで色々な事やってきました。オーケストラで 20 年コンサートマスターとして活動して来ましたし、オーケストラとの競演など、ソリストとしてもヨーロッパと日本で活動を続けて来ましたけど、やはり私の一番力を注いでいるのが室内楽なのです。室内楽は、一番人間の内なる声を表現出来る音楽様式ですし、レパートリーも素晴らしいからです。

しかし、室内楽をサントリーホールのような大ホールで弦楽四重奏をやっても殆ど意味がないことですよ。やはり、自分達が伝えたいものが伝わる空間、それは決して広すぎない空間で、相手が 50 人でも 100 人でもそれに興味をもつ人が集まってくれて、我々が作り上げた音楽を、そういう空間で聴いてもらえることが、室内楽を追及する者が最も願う場面なんですね。そういうことで、勿論東京の室内楽ホールで演奏活動をして来たのですが、自分の好きな時に好きな企画を打ち出すことは、一般のホールを予約したり借りたりということではなかなか上手く実現できないことなのです。それを超えるには、自分が好きなときに使える空間を持つこと、それから良い空間でカルテットを勉強したい、つまりカルテットの道場が、自分で持てたらいいな、というのが私の夢だったんですよ。この会場はスタジオ・コンチェルティーノという名前が付けられていますが、小さなホールともいえるし、また我々のトレーニングの道場でもあるのです。そこでただ演奏するだけではなく、この前の前田先生のレクチャー・コンサートのように、作品の背景、裏付けを聴衆と共に学んで、それを音にして行くという場所は、なかなか得難いものです。去年、芸大を定年退職しましたし、自分の残りの音楽人生を自分で空間を持つことで追及して行けたらいいな、というのが発想の原点です。

中島：岡山先生はずっと前から後進の育成ということにも力を入れられていらっしゃいますね。

岡山：ええ、このスタジオを道場として後進の育成にもより積極的に取り組んで行きたいと考えています。一昔前は、本場の人達に負けないように楽器をこなすということにみんな熱を入れてやっていたんですけど、やはり最終的には音楽を通して何を語るかということに尽きると思います。そのためには技術的なノウハウだけでなく、何のために音を出すのか、この音は何を意味するのかというような、音楽の裏付けの勉強を同時進行させないと、音楽の核心に触れ、人を感動させる演奏は出来ないと思います。そのためには、演奏するだけではなく、音楽学の人、作曲家、音楽評論家など、演奏を支えてくれる方々の協力も得て一緒に音楽を追究して行くことが必要で、セミナーもそういう姿勢で運営しております。

中島：それを実現させて行くためには多くの方々の協力が必要ですね。

岡山：そうなんです。この組織は今は実行委員会と言っておりますが、やがて NPO 法人に移行するのですが、みなさんが音楽を追究する心を持った理想の高い方ばかりで、よい仲間恵まれたと思っています。

中島：先生が情熱をお持ちで、それが周りに伝わるから、よい仲間が集まるのでしょ  
うね。ところで、話しを変えますが、先生はリゾナーレ音楽祭その他で、音楽監  
督としてコンサートを企画されていますが、例えば昨年のリゾナーレ音楽祭では、  
珍しいマーラーのピアノ四重奏曲など、音楽マニアの方々が興味を抱くような選曲  
をされる一方、モーツァルトの「小夜曲」など誰でも知っている名曲に親しみ易い  
解説を加えて演奏するような試みもなされている。それは音楽に造詣の深い方々を  
満足させる一方、初心者の方々も楽しめるように工夫されて、聴衆層を広げて行こ  
うとする努力をなさっていると感じました。

岡山：ええ、おっしゃ  
たように、ここの内容  
も、他では聴けないよ  
うなものをテーマとし  
て取り上げて行く一方、  
誰にでも働きがける力  
を持ったものと両方を  
楽しめるようにしてい  
ます。いまの時代は、  
そういう工夫も必要と  
思います。



終演後の弦楽五重奏のメンバー（左が岡山氏：6月5日）

中島：実は、私は音楽  
会にあまり行かないので、ブルックナーの弦楽五重奏曲は CD では聴いていま  
したが、恥ずかしながら生演奏で聴いたのは今回が初めてでした。

岡山：ええ、演奏会では滅多に演奏されない曲です。しかし、良い曲ですね。5日  
のセミナーには、モーツァルト愛好会の方々がいらっしゃっていましたが、そう  
いう方々にも、モーツァルトの五重奏曲だけではなく、ブルックナーを聴いてい  
ただけたことは、とても意義があったと考えています。

中島：ところで、音楽文化を向上させて行くためには、将来を担う若い音楽家を  
育てて行かなければなりません。いまの時代は若い音楽家にとって自分が思うよ  
うな活動を続けて行くのは大変で、秘めた才能を持っていても、現実の困難に押し  
つぶされて、埋もれてしまう可能性がありますね。

岡山：売れっ子にならなくとも素晴らしい音楽家はいるわけで、それを我々はサポ  
ートして行かなければならないでしょうね。

中島：ええ、まったくその通りと思います。

岡山：才能がなければしょうがないですが、才能を見極め、それを引き出してやる  
努力が必要です。若くて才能のある人は、機会を与えると急速に伸びますから。

中島：無名でも可能性をもった若い音楽家はおりますが、そういう人たちが伸びて  
行けるような状況をつくってあげないと。

岡山：今は、色々な音楽会が開かれていますが、この人は有名でマスコミでとり上げられているから行くという人が非常に多いですね。そこを、少しでも変えたいというの、こういうことをやる目的の一つです。

中島：まだ、我が国の音楽文化が成熟していないということでしょうか？

岡山：いや、それは世界的傾向で、本場（欧米）でも同じですよ。聴衆はスター志向が強く、スターには人が群がるけど、それ以外の素晴らしい音楽家が忘れ去られて行く。だから先生のところ（日本音楽舞踊会議）みたいに、地道に若い人をサポートして行くという活動が必要だし、そういう活動が、もっと色々なところから起こって来る必要があると思います。

中島：今日はよいお話しを伺い出来て本当に有り難うございました。お互いに意気投合できたところが多かったと思います。これからもよろしくお願い致します。

この取材を通して、私達の活動に対しても励ましの言葉をいただき、「私達も頑張らなければ」と、勇気をもらいました。以下に、インタビューいただいた、三人の方々の略歴を紹介します。

#### 岡山潔（ヴァイオリン：TAMA 音楽フォーラム主宰者）

東京藝術大学大学院修了。1968年ドイツ政府給費生としてハンブルグ音楽大学留学。1970年ベルリンにてメンデルスゾーンコンクール「弦楽四重奏の部」第1位。1970年ベルギーのブリュッセルにてイザイ・メダル受賞。1971年から13年間ドイツのボン市ベートーヴェンハレ管弦楽団第1コンサートマスターを務め、ヨーロッパ主要都市で独奏と室内楽活動を行い、1984年にドイツ政府から文化面での貢献に対し功労十字勲章を授与される。同年帰国。読売日本交響楽団第1コンサートマスターとして7年間活躍。1990～2010年東京藝術大学教授。1993～2006年エレオノーレ弦楽四重奏団を主宰し、ベートーヴェンシリーズを中心に活動。2008年より岡山潔弦楽四重奏団を主宰。現在、東京藝術大学名誉教授。ウィーン国立音楽演劇大学客員教授。今年4月より新築したスタジオ・コンチェルティーノでTAMA音楽フォーラムを主宰する。

#### 長尾春花（ヴァイオリン）

東京藝術大学音楽学部付属高校を経て、東京藝術大学音楽学部4年に在学中、現在は青木高志、岡山潔の両氏に師事。日本音楽コンクール第1位、ロン＝ティボー国際音楽コンクール第5位、仙台国際音楽コンクール第3位、東響、東京フィル、日本フィル、新日本フィル、フランス国立放送オーケストラ他多くのオーケストラと競演。2008年より芸大の仲間たちとQuelle Quartett(クヴェレ・クアルテット)を結成、リゾナーレ室内楽セミナーで「緑の風音楽賞」受賞など、室内楽にも意欲的に取り組んでいる。

#### 川口成彦（ピアノ）

盛岡市に生まれ、横浜で育つ。幼少よりピアノを習い、横浜の聖光学院高校卒業。後、東京藝術大学音楽学部楽理科入学。現在、4年に在学中。第2回青少年のためのスペイン音楽ピアノコンクール第1位、及び最優秀スペイン音楽グランプリ受賞。

小林道夫氏とフランツ・シューベルト・ソサエティなどの演奏会で連弾を共演する。これまでにピアノを小池園美、林今日子の各氏に、現在は東誠三氏に師事。また、フォルテピアノを小倉貴久子氏に師事している。

★TAMA 音楽フォーラムのホームページの URL 紹介★

<http://tamamf.s1.bindsite.jp/concert.html>

# 福島日記 (1)

作曲 小西 徹郎

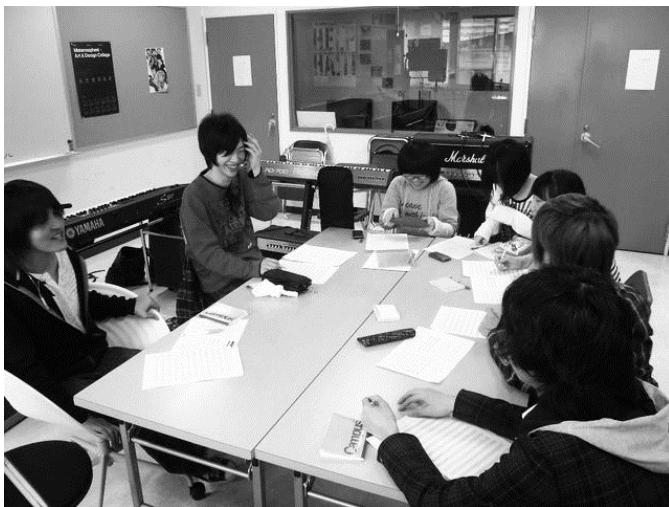
昨年、懐かしいつなぎから福島県郡山市にある「国際アート&デザイン専門学校」にて、単発ではありましたが音楽専攻生に向けて講演をさせていただきました。若い力と熱気、そして彼らの素直さに私の中に親心のようなものが芽生えました。「またみんなで一緒に勉強しような！」と言い数ヶ月が経ち、学校の小島誠一先生からぜひ学校の講師に、というお話をいただいた直後に東日本大震災は起こりました。彼らは今回このような大震災、また福島原発事故という重大な危機にさらされました。今もその危機は続いています。



1年生への初めての講義

震災当日、郡山の校舎ではこの学校の音楽講師の小島誠一先生が危険な中避難誘導をし、先生本人も危機一髪のところで助かったそうです。生徒や先生、学校職員の方々全員が無事であると小島先生からお知らせいただいたとき、私は声を上げて泣きました。よかった、無事でよかったと。

学校内は機材などが散乱し、4月末まで学校はその復旧作業に追われていました。やっ



理論を勉強中の1年生

と新一年生受け入れが整い、私はこの5月12日から毎週木曜日に郡山の学校、キャンパスに通っています。専門学校の学生たちはちょっと引っ込み思案なところもありますがでもとても素直です。将来音楽の仕事がしたい、という夢と希望があって進学してきたはずですが、でも今はその夢や希望も生活を守るということから危機的になってしまっています。目の前にやらねばならないことが「曲の締め切り」とか「仕事」であるということはとても幸せなことだと思います。だから学生たちが幸せな気持ちになれるためにはまずは生

活の安全安心、そして音楽をやりたい！という気持ちに向かわせて、いざなうことだと思っています。

実際、講師を始めて1ヶ月以上が経ちました。今感じることは単に「心のケア」ということではなく、また、音楽を「教える」というスタンスでもなく、彼らと共に学び、一緒に弁当を食べて、そして私自身の想いや考えを「伝える」ということが大切だと感じています。時間を共有していくことの大切さを身にしみています。

これから連載で、福島で音楽を学んでいる若い人たちと私の「今」を届けていきたい、福島は元気なのだ！ということ伝えていきたいと考えています。

(こにし・てつろう 作曲会員)

# 《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

## 第三回 上野雄次 花と音、生と時間の求道 (3)



情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。三回目は、「花道家」として、「花いけ所作」というスタイルを通して「生」を模索している上野雄次氏に、対談形式でお話を伺いたと思います。

### ■上野雄次 (花道家)

1988年、勅使河原宏の前衛的な「いけばな」作品に出会い、華道を学び始める。国内展覧会での作品発表の他、バリ島、火災跡地など野外での創作活動、イベント美術なども手がける。

2005年、「はないけ」のライブ・パフォーマンスをギャラリーマキで開始。地脈を読み取りモノと花材を選び抜き、いけることの独自の生きる世界を立ち上げ続けている。

創造と破壊を繰り返すその予測不可能な展開は、各分野から熱烈な支持を得ている。詩人、写真家、ミュージシャン、工芸家等とのコラボレーションも多数行っている。<http://ugueno.com/>



### ■橘川 琢 (作曲家・日本音楽舞踊会議理事)



作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。

### ■「他者」とのバランス、認識と定義・・・花器 (かき) というもの

— (橘川) 私が感じる花いけの素晴らしさの一つに、花は多種多様な「器」と組み合わせで表現されるということがあります。芸術における他の分野との接点という点から、花いけにおける「器」の意味を是非お伺いしたいのですが・・・

(上野) 「花器というものは、フラワーベースといえれば解りやすいのですが、花が収まる場所のことです。収まる場所と考えれば、こちらの見立て方次第で何でもベースになりま

す。例えば『ドラム缶』は花器として創られた訳ではないけど、こちらがそう考えて合わせれば花器になる。水なしで金網に活ける事もあります。ほかにも映画で、女性が草原で、マーガレットのような花をとって髪に飾るシーンがありますね。髪や顔、頭と、花の髪飾りというバランス関係を思えば、女性の髪もフラワーベースだと思います。」

—それはまた、とてもロマンチックなフラワーベースですね。

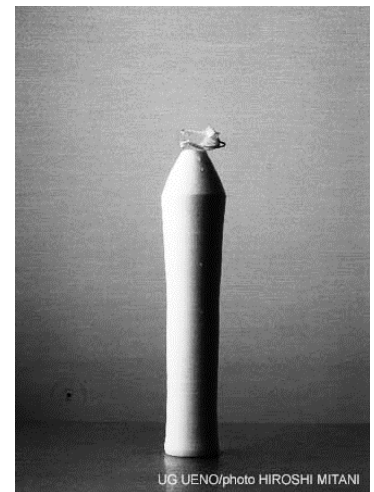
「ええ。他には・・・音楽関連でいえば演奏会とかで贈られる『ブーケ』もそうですよね。あれは花が『花束』として存在していますが、手のひらに収まる姿、持つ人の姿を想定して創られている。体全体に対してのバランスです。人そのものが花器になります。」

—なるほど。「花との構図やバランス」という視点のもと、広く、何でもフィールドにできるのですね。ところで、併せる「器」との出会いや選ぶ基準は？

「『器』に向き合うのは日常的なことです。自然と色んな機会に見ています。でも、じつは出会いに関しては劇的な事は少ないです。古い友人が器を作っていたり、『ちょっとこれに付けてほしい』と勧められたお話とか、自然に持ってきて頂くお話が多いです。黒田泰蔵さんの器もそうでした。」

#### ■上野花道・「静」の花活け・・・関係性の構図

「黒田さんの器、これは白磁ですが、ろくろで引き上げた仕事です。遠心力でできた模様が綺麗で、それがずっと立つ器の表面に。螺旋を描いて上にのびてくる運動は、力の方向性として、理にかなう美しさがあります。さらに葉（釉薬）をかけていなくて、物としてもシンプルに仕上がっています。活けたのは6-7年前ですが、とにかく器が凄くて当時の僕なんか手が届かないずっとレベルの高い仕事だと思い、どうするか真剣に悩みました。この時は『器を活かそう』と決め、何度も挑戦しました。」



上野雄次公式サイトより  
花：上野雄次（ベル鉄線）  
花器：黒田泰蔵（白磁）  
写真：HIROSHI MITANI

—結果、器の先にそっと添えられた花（ベル鉄線）。この構図とバランス、そして想像力に大変驚きます。このようなコラボレーションの時、一番意識したのは何でしょうか。

「これは当たり前の事かもしれませんが、まず『器を活かそう』『対等にやろう』もしくは『花が前に出よう』といった関係を一度決めたら押し通す事だと思います。どんなコラボレーションでもそうだと思うんですが、やっている中でふらふらしてしまうと、見ている側にとってとらえどころがなくなります。この時は、地球の重力の関係性に向かい合い、ずっと伸びる器の姿と、表面の螺旋の模様のこの姿を活かそうと思いました。」

—主・客、その関係性を決定する美意識の根拠は？



「やはり一番は、より美しくなるという事。綺麗だと思ふ形に仕上げたい気持ちですね。この場合は特に、この器を活かす作業をする事で器も活けられた意味が出てくるし、僕自身の花いけもようやく人に見てもらえるのではと。」

## ■交差の先・・・高次の芸術性、そして大衆性について

—なるほど・・・コラボレーションを通じて、自分や自分の分野にフィードバックされるものは？

「まず、花活けは、常に器と空間とのコラボレーションです。その要素を欠く事は出来ないものです。そして外とのコラボレーションですが・・・花いけに関わっている人同士の世界でやっているだけでは、見てもらえる人も少なかったりする訳で。コラボレーションを通して花を活けるという事自体、いろんな人に、こう、いいものだということとして波及していけばいいなと。」

お互い、それぞれは狭い世界かもしれない。特に芸術性の高いものというのは限られた人しか見る機会がなかったりするかもしれないですけど、それでも、面白いものだと思ってもらえる機会になってももらえれば、どんどん広がってゆくのではないか。これは自分だけでなく、分野が成長して広い世界に出てゆくためにも必要なのでは。」

—併せただけでなく強い価値を生む。それは自分達の表現のためだけではない。芸術の交差の先、分野が生き残り成長するためにも。クラシック音楽や現代音楽など、芸術音楽にも敷衍できそうなお話で・・・。

「そうですね・・・多くの方が芸術音楽や芸術表現に親しむことによってその良さを知る人が増えますし、ある程度高いレベルの良さを知れば、その先にある強いイメージとか深いイメージを拾える人の絶対数も増えてくると思うんです。」

## ■成長・・・花、植物、生物の進化の過程から

「成長といえば、人間や動物の進化の過程においても強い外圧みたいなものがあり、それぞれタフになったり、制するなり従うなりその環境に順応できたものがこの

### 「はないけ路地裏幻想」

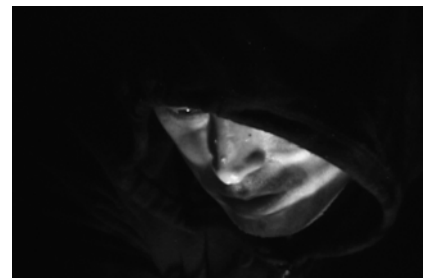
上野雄次（はないけ所作）×中里和人（写真家）

日時：2009年11月7日

場所：SOURCE Factory（墨田区八広）

撮影：古川久記

「草花を生け、そして容赦なく破碎する上野氏のライヴは、生死を含め、『命の存在』そのものを我々に突きつける。（古川久記）」



【古川久記（FURUKAWA Hisanori）】

映像作家・照明家。多数の映画、CM、PVにスタッフとして参加した後、独立する。2006年より花道家の上野雄次氏の花活けライヴの映像を撮り始める。現在、上野雄次氏とコラボレーション相手との対談「花がたり」を撮影、今までの上野氏のライヴ映像と共にYouTube等にて配信している。



地球上にある景色や状況だったりすると思うんですよね。コラボレーションで言えば、互いのバイブレーションにずれがあるなと思ったら、逆に合わせず強くコントラストをつけてゆくことで二つの行為を一回ばーっと離す。その後、その間を埋めるための、すごくタフな時間を乗り越えてやるんだというつもりで。これ、どうやって埋めれば良いんだと苦しみながら、最後、埋まってゆく。」

—なるほど。自らタフな時間を作り、苦しみ、超えてゆく。

「あと・・・強いものだけが残るわけではないんですよね。例えば極端に弱いものがあったとしても、タフな時間の果てに変わったうねり、まがりを見せる。それがそれぞれの個性につながってゆくことにもなります。ツタなど見ているとそうですね。」

そういう意味で言うと、人と人とのコミュニケーションというものは、突き詰めれば自分と他との外圧のやりとり。そこで生まれてきた差異とか同調とかが、色んな形になって血肉に変わってゆく。花や植物の場合、特に姿かたちでそれが現れている。」

—ええ。

「強い外圧や差異。その距離を埋めるだの、距離を強く感じるなどしているうち、色んなうねりが生まれてきて面白いことになってゆく。順応と変化、それを現時代、空間の中で求めていかなければ、次の時代や空間に石を強くめがけて投げることが出来ない。」

—自ら自分に強大な外圧、負荷を課し、変化の中で成長し限界を超えて、初めて次に進む。・・・思えば最初の「花の記憶」以降、上野さんとのコラボレーション全てがそうでした。五線譜に上野さんの「花道」というパートを作って、否応無しに、音だけでなく花の姿、植物の姿、そして花の先の実の姿を思いながら曲を書く。明らかに「五線譜の論理を超えたもの」の世界と圧を意識し、身をよじらせつつ作曲しています。

「ええ。僕も橘川さんから楽譜を頂いて、リハーサルに立ち会って音を聴かせて頂いて録音し、覚えるまで聴き込んで本番のイメージを作っています。僕自身楽譜が読めないから、音を覚え、描かれた世界観を覚え込んで共有する事が必要なんです。『花』や『所作』の意味を含め、僕になにが出来るとかギリギリまでの葛藤があります。」

—そうした葛藤の姿を前にしますと、私も「上野さん」と「花」というよりも、上野さんという姿に体现された「花いけ」という分野の思想、思索、哲学と対峙している気持ちになります。繋ぐ象徴やメタファー(暗喩)に助けられながら、自分の作品との接点は何があるのだろうか、いつも問いかけています。そして最後は、持っているツールの差し出し合いだけではなく、存在価の投げかけ合いに。

さらにいえばコラボレーションは足し算ではない。どんなかけ算が出来るのか。かけ算である以上、私が1そのままでは上野さんの力を借りるだけになってしまう。1以下であれば答えは小さくなり、さらに最悪の場合、ゼロになってしまう。

「ええ。あの人はだいたいこういうことが出来るとか、私はこういうことが出来ると予想して互いのその時点のものをかけ算したとしても、そんなに新しい景色が見えてくるとは

思えない。僕が数えられる最高の数字と橘川さんの数えられる最高の数字。そのかけ算の結果を見たい。自分自身の限界値、超えられるギリギリのところはどこなのか、こういうところでせめぎあうことで、初めて新しい景色が見える。そこを僕は見たいのです。」



### ■花と音、生と時間の求道

「僕が思うに花という存在は、僕らみたいな動物とは違う生体をもった生物の、ひとつの、象徴的な生命の美しさが極まったもので、それが形として存在しているものなのだろうなと思っています。一つ一つの個体が持っているバランスの中、一番極まったものだからこそ美しい。そういう花と僕自身との唯一の共通点は、生き物であるという事。そして生きているが故に持っているバイブレーションを発するという事なのだと思います。音楽はバイブレーションそのもの・・・僕は音こそ命そのものと思うのですが、どうですか？」

—そうですね・・・音楽と命という事でいえば、いつも肝に銘じている事があります。それは、絶対の事実として、音楽は常に人生の時間、寿命という有限の時の中からの頂き物であるという事。時の形をした、人の命の一部を頂いて存在しているということです。それは関わる人の時間全てがそうです。当日の10分なら10分、2時間なら2時間の演奏会のその時間の話だけではなく、企画者、制作者、出演者、スタッフ、お客様・・・その他多くの人生の時間を明確に頂いて、コンサートや音楽を現出している。互いに人生の時間の、命のやり取りをしながら。

「ええ。」

—だからこそ常に音楽は命そのものと考えますし、上野さんが花を見つめるように、私にとって音楽とは「人生と命の美しさの極まったもの」であってほしい。さらに、音楽のある時や風景を、生命を愛するようによくおしみ、慈しみつづけたい。花は手に取れる命、音楽は命に寄生する花・・・そう感じております。

「花は何者とも寄り添えますし、しかも象徴的な景色に変えてくれます。それは『それ自体が生命を表現している』ということがなし得ている大切な事。僕がすべき事は、花いけ所作を通して『生きているとは何なのだ』という事をともに見る事であり、そこに生を投影すること。そういう関わりが出来たら、お借りしてきた、命を絶ってきたものに対する決着をつけられる。花いけも音楽も、コラボレーションも、それぞれの命に本当の意味で呼応するような、そういうものであり続けたいと思います。」

—はい、今後とも、是非そうありたいと思います。長い時間有難うございました。

(《明日の歌を》楽友邂逅点 第三回 完)

5月はコンポージアムのように明らかに原発事故懸念による審査員の来日中止による延期もあった。震災の影響は残り、異常が日常化した。

**1日**Tokyo Cantat「日本の音素材による合唱」間宮芳生の仕事。現代合唱史を拓いた合唱のためのコンポジションを中心とした4時間。栗山文昭指揮、栗友会合唱団でorg、hp、cb、打も加えたコンポジション第九番は初演以来の再演。デモーニッシュな音響エネルギーの奔流。集められた創作を短く三期に分ければ、エクリチュール巧みな初期、フォークロアのダイナミックな生命力を探求した中期、自由な軽みも聴こえる後期。**11日**日本音楽舞踊会議作曲部会作曲部会作品展。これは本誌6月号に音楽評を書いた。**12日**飯守泰次郎指揮、東フィル定期で矢代秋雄のチェロ協奏曲を長谷川陽子で、**15日**ピアノ協奏曲を田村響で聴く。東フィルは同じ指揮者と演目へ、サントリーとオーチャードで別の協奏曲と独奏を加える企画を行なっている。**12日、15日**はワーグナーのマイスタージンガー前奏曲、ドヴォルジャーク交響曲第8番に加えた。精緻に書きこまれた密度の濃い音楽を素晴らしい集中の演奏で堪能。長谷川陽子のチェロ、田村響のピアノ共に、日本の戦後音楽史を作った先達への深い共感あり。若手へ受け継ぐ東フィル企画にも敬意を表す。



**16日**第9回東京音楽大学学長賞選考会は学内作曲コンクール。管弦楽から小編成までの学生出品作より池辺晋一郎、西村朗らの教授陣が審査。運営は学生に任せ教員らが補佐する。演奏も学生が集める学生主体で、発達途上の若き才能を知る好機会。茂木弘文、山本夏子ほか。**17日**オペラシティB→Cバッハからコンテンポラリーへ132のオンド・マルトノ大矢素子リサイタル。原田節を迎えたミュライユのマッハ2.5に超現実的音響美。**21日**藤岡幸夫指揮、東フィルで吉松隆マリimba協奏曲の東京初演。三村奈々恵ソロ。楽器の源流を想起させるアフリカンな味わいの25分3楽章。幾分時間を持って余したか圧縮して流れを重視すべき。5月末には第20回記念ヴィオラスペースで藤倉大の委嘱初演あり。**29日**トロッタの会13。ガルシア・ロルカ作・今井重幸編曲ロルカのカンシオネスで木部与巴仁がSQ、Gt.、Fl.伴奏で熱情込めた歌唱。スペインに造詣深い今井の編曲は鮮烈。橘川琢の都市の肖像第四集は作曲後に作詩（木部与巴仁）だそうで、橘川に今までと違った配慮を感じさせる一步。堀井友徳の北方譚詩第二番は前作を踏まえた合唱曲。新味よりセオリーを。他との競合を避けた。田中修一のMOVEMENTは歌詞や編成を変えて続ける同主題シリーズだが、何故これを超えるかの必然を聴き取れない。伊福部昭の協奏風狂詩曲は打楽器を加えた今井重幸編曲版。賑やかな演出的機会性編曲。清道洋一のヒトの謝肉祭は震災による自身の無力さを、故意に聴こえ難く読む詩唱や引用作曲で表現。ゆえに詩や題名に齟齬を生んだ。清道の独り善がりも悪くも発揮された例。今井重幸のカンタータ叙事詩断章・草迷宮は音楽だけでなく今井の全芸術への興味が聴き取れる。声楽5，器楽10の編成で今井好みの野趣溢れる音響美と言霊から構築した。

(にし・こういち 賛助会員)

第24回 日本音楽舞踊会議ピアノ部会公演

# ～きらめく夏に～

《フランツ・リスト生誕200年にちなんで》

2011年7月15日（金）19：00開演

杉並公会堂（小）

主催：日本音楽舞踊会議 ピアノ部会

＜ ごあいさつ ＞

この度、第24回日本音楽舞踊会議ピアノ部会コンサートを開催できる事、出演者一同、格別の思いで迎えました。3月11日の大震災以来、数々の不安要素を考慮し、ピアノ部会は話し合いを重ねてきました。自粛の意見もありましたが、ほとんどの方は、50年に渡る長い歴史を重ねてきたこの音楽文化団体の「今」の使命は「音楽を続ける事」であり、私達音楽家の宿命でもある・・・と、開催する事を決定しました。元来、音楽は苦しい時にこそ生まれ、また苦しい時にこそ寄り添ってくれるものです。音楽の力を信じ、私達に出来る事を精一杯表現すべく、このコンサートに望む所存です。1人でも多くの方に聴いて頂けたら幸いです。

実行委員長 広瀬美紀子





## 【プログラム】

連弾の為のソナタニ長調                      モーツァルト                      (プリモ) 深沢 亮子  
Sonata D-dur K381                      Mozart                      (セコンド) 栗栖 麻衣子

2つの伝説より「波の上を渡るパオラの聖フランシスコ」                      リスト  
Deux Légendes, II St. François de Paule marchant sur les flots                      Liszt  
上埜マユミ

リゴレット・パラフレーズ                      リスト  
Rigoletto Paraphrase                      Liszt                      田中 俊子

メフィスト・ワルツ第1番 (村の居酒屋の踊り)                      リスト                      広瀬 美紀子  
Mephisto Walzer Nr.1                      Liszt

### ----- 休憩 -----

「ソナチネ」 1. モデレ 2. メヌエット 3. アニメ                      ラヴェル  
[Sonatine] 1. modéré 2. Menuet 3. Animé                      Ravel                      太田 恵美子

「魔笛」の主題による7つの変奏曲 変ホ長調 Wo046                      ベートーヴェン  
Sieben Variationen über das Thema "Bei Männern, welche Liebe fühlen"  
aus Mozarts Oper "Die Zauberflöte" Wo046                      Beethoven  
並木 桂子 / (チェロ) 富永 佐恵子

カルメン・ファンタジー                      ビゼー=ブゾニ                      戸引 小夜子  
Carmen-fantasie                      Bizet=Busoni                      (ダンス) 清水 フミヒト

イスラメイ (東洋的幻想曲)                      バラキレフ                      北川 暁子  
Isramey                      Balakiev



## 《演奏者プロフィール》

### 深 沢 亮 子



15歳で日本音楽コンクール首位受賞。ウィーン国立音楽大学に留学し首席で卒業。1961年ジュネーヴ国際音楽コンクール1位なしの2位。以来、ムズィークフェライン黄金の間やコンツェルトハウス等で度々オーケストラとの協演を始め、日本、ヨーロッパ、南米、アジアの諸国で精力的に演奏活動を行い、日本の作品も度々紹介している。又、国際音楽コンクールや日本音楽コンクール他の審査員を務める傍らラジオ、TVに出演。数多くのCD、著作、楽譜の出版。去年はデビュー55周年記念リサイタルを春秋東京にて行ない好評を博す。日本音楽舞踊会議代表理事。

### 栗 栖 麻 衣 子



日本大学芸術学部音楽学科ピアノコース卒業。2001～2002年ウィーンにてヴィクトル・トイフルマイヤー、許裕安のもとピアノ演奏及び教育法について研鑽を積む。第32回家永ピアノオーディション合格。第12回JILA音楽コンクールピアノ部門第1位。ソロ・デュオリサイタル開催等、ソリスト、伴奏者として演奏活動を行う傍ら後進の指導にあたる。これまで上田純子、黒川浩、大原裕子、深沢亮子他各氏に師事。国際芸術連盟専門家会員、日本音楽舞踊会議会員。

### 上 埜 マ ユ ミ



北海道出身。北星学園女子高等学校音楽科卒業。国立音楽大学音楽学部演奏学科鍵盤楽器専修ピアノコース卒業。国立音楽大学北海道同調会演奏会に2008、2009年出演。ヤマハ音楽教室発表会にゲスト出演。これまでに渡辺卓、浜尾夕美、戸引小夜子、エフゲニ・ザラフィアンの各氏に師事。

### 田 中 俊 子



東京音楽大学ピアノ演奏家コースを首席にて卒業。同研究科修了。ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽院夏期講座受講。(ヘレナ・コスタ教授に師事)カワイコンサート、ピアノを楽しむコンサートにてソロリサイタル開催。新日フィル、新星日響他、オーケストラとコンチェルトを共演。東京文化会館でのコンサートはテレビにて放送される。その他ソロ、デュオ、アンサンブル等、幅広く活躍する。故藤原千代子教授、深沢亮子各氏に師事。淑徳学園ピアノ講師。

全日本ピアノ指導者協会審査員。

## 広瀬 美紀子



東京芸術大学器楽科卒。同大学院修了。1981年デビューリサイタル以来、交響楽団との協奏、室内楽、伴奏及びソロで全国各地のコンサート、音楽祭に多数出演。・フランス、ナント・コンセルヴァトワール伴奏ピアニスト、全日本ソリストコンテスト及び日本クラシック音楽コンクール審査員。PTNA コンペティション審査員及びステップアドバイザー。全日本ピアノ指導者協会正会員。日本ピアノ教育連盟会員。日本音楽舞踊会議理事。PTNA ピアノステップ八王子中央ステーション代表。現在山梨県立大学講師、八王子音楽院院長。'09年5枚目CD「ヴィラ＝ロボス、ピアノ作品集」、'10年6枚目CD「広瀬美紀子ピアノリサイタル2010ライブ」好評発売中。

## 太田 恵美子



国立音楽大学ピアノ科卒業。桐朋学園講師を経て、現在、日本音楽舞踊会議会員。二期会ロシア歌曲研究会会員。世川岬子、伊東うた、A・アレックスの各氏に師事。・東京交響楽団との共演、チェボタリョフの「ポエマ」の初演、ピアノソロ、声楽、器楽、合唱などの伴奏を務める。1995年、ドイツ及びデンマークにて、1999年、スイスにてコンサートを開催。

## 並木 桂子



桐朋学園大学ピアノ科卒業。ローマ聖チェチリアアカデミア室内楽科を満点と栄誉賞を得て卒業。シエナ・キジアーナ音楽院ピアノ科奨待生。アンサンブルピアニストとして活動、室内楽とピアノデュオのシリーズを企画。現代曲の演奏やコンクール審査も多い。ピアノを故井口秋子、三浦みどり、故Gアゴ스티、マージ、室内楽を岩崎淑、故R ブレンゴラ、B カニーノ、末吉保雄諸氏に師事。日本フォーレ協会、練馬区演奏家協会会員。・ソロCD「Papillons」をリリース。

## 富永 佐恵子



桐朋女子高等学校付属音楽科を経て、同学園大学音楽学部を卒業後、明治安田クオリティオブライフ文化財団より奨学金を受けジュリアード音楽院に留学。同オーケストラ首席チェリストとして“Focus Music Festival”に毎年出演。アーティストインターナショナル主催「第24回ニューヨークデビューアワード」受賞、カーネギーホールでの受賞コンサートでリサイタルデビュー。

NHK・FM リサイタル等に出演。帰国後はソロ、室内楽等多岐に渡り活動中。これまでに松波恵子、倉田澄子、毛利伯郎、岩崎洗、ハーヴィ・シャピロ各氏に師事。

## 戸引 小夜子



国立音楽大学器楽学科ピアノ科及び専攻科卒業。NHK オーディションに合格し、「コンチェルトの夕べ」に出演。・1996年飯塚シニア音楽コンクール・ピアノ部門で優勝。カーネギー・ホールにてジョイント・リサイタル、サン・ノゼ市でリサイタルを開催。2002年ペテルブルグにてコンチェルトに出演等。青木和子、水谷達夫、S・ドレンスキー、ウラジーミル・竹之内の各氏に師事。国立音楽大学講師を経て現在、日本音楽舞踊会議理事長。

## 清水 フミヒト



2008年文化庁在外研修員として、NewYorkで活動、そこで小西徹郎氏作曲によるソロダンス作品「FLOWER」を発表。  
ダンサーとしての活動のほか、振付、演出、指導と様々な視点から舞踊活動に取り組んでいる。全国舞踊コンクール第一位、文部科学大臣賞など多数受賞。

## 北川 暁子



1969年ブザーニ国際コンクール第3位。ベーゼンドルファーコンクール優勝。1970年ミュンヘン国際コンクール第2位（1位なし）。1984年デビュー20周年にベートーヴェンピアノソナタ全32曲を7夜連続演奏。デビュー以来、世界各地で演奏。  
武蔵野音大・ウィーン国立アカデミー卒。  
現在、東京芸術大学教授。

### 『音楽の世界』6月号の訂正

グラビアページ2ページ目の左上の⑥六重奏の写真に鄭胤先さんの写真が重なって表示されてしまいました。ファイル形式をPDFに変換した際生じたミスです。右のように訂正させていただきます。



⑥六重奏：左より加藤千理(Fl.)、椎野未花(Ob.)、草間葉月(Pf) 齋藤嵩之(Horn)、小林香緒理(Fag.)、誉田未季(Cl.)



## 《曲 目 解 説》

### 連弾の為のソナタニ長調 W. A. モーツァルト(1756-1791)

モーツァルトが作曲した4手の為のピアノソナタは未完の1曲を含め6曲ある。ニ長調 K. 381 (123a) は、モーツァルトが16歳のとき、1772年中頃にザルツブルクで書いたとされる。(この年の10~12月は父レオポルトと3回目のイタリア旅行に出かけており、オペラ『ルチオ・シラ』K. 135がミラノで上演された)以前は1781年ウィーンで作曲されたと考えられていたが、草稿を姉のナンネルが持っていたことと、モーツァルト姉弟がザルツブルクで演奏したと推定されるようになり新番号 K. 123a が与えられた。

他の初期4手作品 (K. 19d、K. 358) 同様、モーツァルトとナンネルが連弾するために書かれたとされている。二人が並んでピアノの前に座っている肖像画は有名である。

モーツァルト音楽の研究者アルフレート・アインシュタインは『このニ長調ソナタはイタリア風シンフォニアを4手に編曲したものとみるのがよい。弦・管楽器群、ソロとトゥッティがはっきりとわかれているシンフォニアの意味である。アンダンテでは第一奏者の旋律を第二奏者の《ファゴット》または《チェロ》の二重オクターヴで強化するなど正当な楽器編成法の効果を用いている。』と語っている。

(栗栖麻衣子)

第一楽章 Allegro ニ長調 4分の4拍子 ソナタ形式

第二楽章 Andante ト長調 4分の3拍子 ソナタ形式

第三楽章 Allegro molto ニ長調 4分の2拍子 ソナタ形式

### 2つの伝説より「波の上を渡るパオラの聖フランシスコ」 F. リスト(1811-1886)

この曲はリストが50歳代初めの1861年頃、精神的に弱っている時期に作られた。リストは十年來に渡ってヴィットゲンシュタイン侯爵夫人カロリーヌとの結婚を強く望んでおり、1861年、ヴァチカンからついに許可がおりたが妨害を受け、同年の10月の結婚式前夜になって結婚が取り消されてしまった。この頃からリストは宗教の世界に入ってしまう。リストはシュタインレ作の「水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」という絵画を所持していて、それを見てインスピレーションを受けて作曲をした、と言われている。パオラの聖フランチェスコとは、メッシーナ海峡を、マントの上に乗って水の上を渡っていった、という伝説を残した人物である。(上埜マユミ)

### リゴレット・パラフレーズ F. リスト(1811-1886)

リストは、1811年、ハンガリーに生まれた大ピアニストであり、大作曲家です。ピアノに関する作品は、作曲者がピアノの鬼神といわれるだけあって、ほとんどの作品が高度の技巧を要するものが多く、ピアノの表現力を拡大した点において、その功績は多大です。リストは、モーツァルトからワーグナーにいたるまでのオペラ作品を、ピアノ演奏用に編曲しています。「リゴレット」は、1851年にローマで初演されたヴェルディのオ

ペラです。リゴレット・パラフレーズは、1859年、オペラ「リゴレット」の第3幕の有名な四重唱を編曲したもので、この曲は非常に華麗な曲調のため、数あるオペラ編曲ものの中でも最も広く演奏されています。

昨年は、ショパン生誕200年、ということで、各地で、ショパンの作品が多く演奏されましたが、今年は、リスト生誕200年にあたり、そのお祝いの意味も込めまして、大好きなリストのために、心を込めて弾きたいと思います。

(田中俊子)

### メフィストワルツ第1番 (村の居酒屋での踊り) F. リスト (1811-1886)

リスト(1811~1886)は、19歳の時ベルリオーズ(1803~1869)に、ゲーテの「ファウスト」を読むように勧められて以来、この題材に興味を持ち続けた。

(因みに最晩年の5年間に「メフィスト」と名の付く作品を5曲残している。)

1854年ゲーテによる「ファウスト交響曲」を完成。その後レーナウの「ファウスト」の24のエピソードより「村の居酒屋での踊り」「夜の行進」を選び、オーケストラ曲を作曲した。その前者のピアノソロ用が今日演奏する「メフィストワルツ第1番」である。

「ファウスト」は中世以来の伝説で、博識を持った学者「ファウスト」が全ての快楽を知りつくす為に悪魔メフィストフェーレスに魂を売る・・・という物語。「ファウスト」と「メフィスト」という真逆の性格の登場人物は、実は1人の人間に内在する二面性でもある。(表と裏、光と闇、絶望と希望、神と悪魔、美と醜 etc...)

リスト45~51歳頃の作品だが、この頃のリストの史実を知る程に内外共にどれだけの苦しみの渦中にいたかが想像でき、「ファウスト」と「メフィスト」にリストの苦悩が重なる一曲である。

(広瀬 美紀子)

### 「ソナチネ」 M. ラヴェル (1875-1937)

ラヴェルの第2期(完成期)の作品。彼独自の精巧緻密な構成によって「感情表現」よりも「客観的な描写」に徹する、という傾向が確立された。しなやかでいて歯切れ良く、絹のように繊細な響き、洗練されて、そして生き生きとしている。これがラヴェルの音楽である。

第1楽章(モデレ) 第1主題は旋律が両外声部で歌われる。この4度の音程は全楽章に見出される。中間部、並行5度の旋律が効果的である。

第2楽章(メヌエット) 左手の伴奏が平行空虚5度によっている。中間部、見事な転調で主題に戻る。

第3楽章(アニメ) いきいきとリズムックなアクセントを伴ったアルペジオの主題。第2主題は4分の5拍子。コーダはトレ・ザニメ(大変速く)。アルペジオで締めくられる。。

(太田恵美子)

### 「魔笛」の主題による7つの変奏曲 変ホ長調 Wo046 L. v. ベートーヴェン (1770-1827)

1791年に初演されたモーツァルトの歌劇「魔笛」は定着した人気オペラとなっていた。ベートーヴェンは、その第1幕でパミーナとパパゲーノが歌う二重唱「恋を知る人には」を主題としたチェロとピアノのための変奏曲をかいた。1801年ころの作品と推定され、同じ年にはピアノソナタ「月光」やヴァイオリンソナタ「春」等もかいている。

(並木 圭子)

### カルメン幻想曲 G・ビゼー＝F・ブゾーニ

F・ブゾーニ(1866～1924)はドイツ古典音楽の校訂、大バッハのオルガン曲のピアノへの編曲を行い、又20世紀の新しい音楽を予測する美学理論によって知られている。G・ビゼー(1838～1875)がメリメの小説による4幕のオペラ「カルメン」をパリ・オペラ・コミック座で上演した。この「カルメン」による幻想曲を1920年にブゾーニが作曲している。ハバネラ"恋は野の鳥の様に気ままなもの"とカルメンが歌う曲、闘牛士の歌(闘牛士・エスカミリョのアリア)、前奏曲からのモチーフ等々をブゾーニ特有のハーモニーを使って書いている。本来はピアノ演奏だけでコンサートのプログラムに載るのが通常だが、日本音楽舞踊会議の「舞踊」の面をプラスして、本日はモダン・ダンス創作舞踊家の清水フミヒト氏に参加して頂いた。これは音楽を聴くということに加えて視覚から体を感じて理解する、臨場感を共有したり、お互いの専門を共存して新たな試みを重ねることでさらに音楽の可能性が広がり、新しいコラボレーションが生まれるのではと思う。この度の企画に真剣に取り組んで下さった清水氏に感謝したい。

(戸引 小夜子)

### イスラメイ(東洋的幻想曲)

### M. バラキレフ

バラキレフ(1837-1910)は、キュイ、ムソルグスキー、リムスキー＝コルサコフ、ボロディンと共に立ち上げたロシア国民楽派五人組の指導的立場を果たした作曲家である。広いロシアの様々な民俗音楽を採集し、殊にコーカサス地方の音楽を取り込んだ作品が多くある。「イスラメイ」は副題に「東洋的幻想曲」とあり、コーカサス山脈の北カバルディノ地方及びアドゥイゲイ地方の民俗舞曲を用いている。バラキレフがピアニストとしても活躍しただけに、華麗なピアノリズムを駆使した曲となっている。華やかなA,Cの部分としっかりと歌うBの部分とで構成されている。のちにラヴェルが「イスラメイ」以上の難曲を意識して「スカルボ」を作ったという話は有名である。

(北川 暁子)

全日本舞踊連合とは、日本バレエ協会、全日本児童舞踊協会、日本舞踊協会という4つのジャンルの舞踊団体の連合体で、日本の舞踊界を統括する組織といえる。その創立35周年記念公演が、6月4日浅草公会堂で開催された。4団体がそれぞれを代表する4つの作品を発表したが、身体表現も、音楽、音響の扱いも、それぞれの部門により特徴があり、また完成度の高い作品が揃っていたため、十分楽しむことが出来た。

最初に日本バレエ協会作品『バ・ド・カトル』が下村由利恵、島添亮子、永橋あゆみ、堀口純の4人のバレリーナにより華麗に踊られ、続いて7つの舞踊団体の共同制作による全日本児童舞踊協会作品『童心をうたう・森のものがたり』が、大勢の子供達により、可愛らしく、賑やかに、そして生き生きと踊られた。

3番目の現代舞踊協会作品は、井上恵美子作・構成・振付による『かもめ食堂』。この作品は2006年に江口隆哉賞を受賞しているが、私は受賞前に観たことがあり、その時に比べ、より作品の説得力が増していると感じた。

まず母親を演じた井上恵美子自身の、時にコミカルで、時に感情を露わにした激しい演技、栗田麗、天野美和子などによる激しく切れのよい群舞、娘役を演じた酒井杏菜の心の葛藤を感じさせる悩ましい動き、都会の生活と田舎の生活、母と娘の反目と和解、変化に富んだ踊りの場面を通して、観客にドラマチックに伝わって来た。華麗な群舞を持ち味とする井上だが、より内面的な表現力をも身につけて来たようだ。

休憩を挟んで、最後に日本舞踊協会作品の『日 月 星』が演じられた。音楽は深見須磨子の詩に[日、月、星]それぞれに異なった作曲家が作曲した長唄である。それぞれ男性舞踊家の踊り、男女の舞踊家によるデュエット、女性舞踊家の踊りが観られ、視覚的にも華やかで、公演の最後を飾るに相応しい演目となった。

今回のように、ジャンルの異なる舞踊作品を比較しながらまとめて観ることが出来る機会は、なかなかあるものではない。舞踊芸術の裾野を広げ、愛好家を増やすためにも、このような企画を是非続けて欲しいと願う。

(なかじま・よういち 本誌編集長)

# 会と会員の情報

## CMDJ 会と会員のスケジュール

7 月

- 3日(日) ピアノ部会試演会【11:00~14:00 戸引宅】
- 5日(火) 声楽部会コンサート「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」  
【すみだトリフォニー小ホール 18:30】
- 7日(木) 定例理事会【事務所 19:00】
- 9日(土) 原宿・午後のひととき～運命は扉をたたく～  
並木桂子、田中俊子 (pf.) 共演:富永佐恵子 (Vc) 曲目:運命 (4手連弾), リスト:バラード2番ほか【原宿アコスタジオ 14:45 2500円】
- 9日(土) 深沢亮子 ロビーコンサート F. シューベルトソサエティ  
共演:片野坂栄子 (Sop) 【日生劇場 14:00】
- 13日(水) 深沢亮子 N響、読響の首席奏者との室内楽の夕べ  
曲目:シューベルト/ますほか 共演:中村静香(Vn)、店村眞積(Va)、毛利伯郎(Vc)ほか【目黒久米美術館 18:00】  
(3月29日開催予定でしたが、東日本大震災の為延期になりました)
- 15日(金) ピアノ部会主催コンサート「きらめきの夏に」  
ソロ・連弾ピアノ、室内楽【杉並公会堂小ホール 19.00開演】
- 16日(土) 笠原たかソプラノリサイタル 曲:ブラームス「永遠の愛」、シューマン「女の愛と生涯」ほか(イエルク デムス氏が病気療養のため来日不可となり、急遽、大井美佳ピアノでの公演と変更致します。)【サントリートホール ブルーローズ 14:30開演 4,000円】
- 23日(土) 高橋通一 琴サマーコンサート【小田原市生涯学習センターけやきホール(旧中央公館) 14:00開演 1,500円】
- 30日(土) 高橋通一 琴サマーコンサート【飯能市民会館 小ホール 14:00開演 1,500円】
- 31日(日) 戸引小夜子「ソロと2台ピアノの夕べ」 共演・安達朋博  
曲目:リスト・ドビュッシー・ミヨーほか  
【大成コンサート・スタジオ 17:00 軽食つき 5000円】
- ◇助川敏弥－「ちいさないのちのために」Lacrimosa をフジコ・ヘミング(Pf.)がミュンヘンで録音終了。日本国内でも発売予定。録音監督は歌手ペーター・シュライアーの息子。
- ◇助川敏弥－栃木県ピアノ・コンクールで助川敏弥作品全課程で課題曲に。  
参加申込締切・2011年8月13日まで。申し込み・問合せ/ NPO 法人くるみの会  
音楽振興会「栃木県ピアノコンクール実行委員会事務局 TEL:028-655-3228

8 月

- 8 日(月) 定例理事会【事務所 19:00】  
23 日(火) 深沢亮子 朝日カルチャーセンター 共演：上村文乃 (Vc)  
【新宿住友ビル 7F 13:30~15:00】  
28 日(日) 助川敏弥-栃木県ピアノコンクール課題曲作曲者特別講座【栃木総合文化  
センターリハーサル室 A 級-D 級 13:30~15:30・E 級-G 級 16:00~19:00】

9 月

- 7 日(水) 定例理事会【事務所 19:00】  
15 日(木) CMDJ オペラコンサート 2011 『愛の悲劇』  
【すみだトリフォニー小ホール 18:30】  
17 日(土) 浜尾夕美ピアノリサイタル シューマン：ピアノ・ソナタ第3番へ長  
調 作品 14【浜離宮朝日ホール 18:00 3,500 円】  
25 日(日) 深沢亮子 千葉音楽コンクール本選審査  
30 日(金) クラシックと能楽 メンデルスゾーン：Vn. と Pf. の為のソナタ・鶴(能)  
他、能：友枝雄人、Vn. 北川靖子、Pf. 北川暁子。  
【セルリアンタワー能楽堂(澁谷) 18:30 開演 指定席 8,000 円、問い  
合わせ 03-3477-9999 他】

10 月

- 4 日(火) 20 世紀以降の音楽とその潮流～様々な音の風景Ⅷ～  
(詳細未定)【すみだトリフォニー 小ホール】  
7 日(月) 定例理事会【事務所 19:00】

11 月

- 7 日(月) 定例理事会【事務所 19:00】  
10 日(木) 深沢亮子 Duo リサイタル 中村静香さんと (Vn)【東京文化会館 19:00】  
11 日(金) 並木桂子作曲家シリーズⅤ ドヴォルジャーク  
曲：ピアノトリオ「ドゥムキー」ほか【ティアラこうとう小ホール 19:00】  
12 日(土) CMDJ 若い翼によるコンサート 4【すみだトリフォニー小ホール】  
出演者募集中(戸引担当)  
19 日・20 日(土・日) 栃木県ピアノコンクール本選会  
全課程課題曲に助川敏弥作品【宇都宮短期大学須賀正記念ホール】

12 月

- 6 日(火) ピアノと室内楽の夕べ  
モーツァルト：ケーゲルシュタットトリオほか  
【音楽の友ホール 19:00】  
深沢亮子(Pf.)、恵藤久美子(Vn.)、安田謙一郎(Vc.)、藤井洋子(Cl.)  
7 日(水) 定例理事会【事務所 19:00】  
10 日(土) 深沢亮子 麦の会チャリティーコンサート共演：岡山潔 (Vn) 他  
【津田ホール 14:30】

2012年

1月

22日(日)「2012年新春に歌う」(仮称)【すみだトリフォニー小ホール】  
(詳細未定・昼間公演)

2月

11日(土・祭) 日本音楽舞踊会議 第50期定期総会

23日(土) 深沢亮子ピアノリサイタル

共演：ブリュッセル弦楽四重奏団【浜離宮朝日ホール 19:00】

3月

12日(月) 日本音楽舞踊会議主催「出版コンサート(仮称) 詳細未定  
【すみだトリフォニー小ホール】

24日(土) 日本音楽舞踊会議主催「コンチェルトの夕べ」(仮称)

【ヤマハ・エレクトーンシティ渋谷 16:00開演】出演者募集中(戸引)

5月

10日(木) 作曲部会コンサート

【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】

9月

8日(土) 深沢亮子ピアノリサイタル 共演：ウィーン弦楽トリオ

【浜離宮朝日ホール 14:00】

会員・賛助会員の皆様へお知らせとお願い

- 上記スケジュール記載の本会主催事業(ゴシック文字)には、会員・賛助会員・CMDJ友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。
- 毎号掲載されるこの欄に皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたはFaxでお知らせ下さい。
- お知らせの際は、①〇月〇日(曜日) ②会員名 ③催し物(出版物名) ④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容を一つ ⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。
- このスケジュール欄は、エコーと月刊「音楽の世界」に毎号掲載されます。



## 編集後記

東日本大震災から4ヶ月近くが経過しましたが、あまりに大きな災害だったため、復興活動もなかなか進まず、その衝撃は我々の心から消えることはありません。今月号の深沢亮子氏の論壇も大震災に触れられておりますし、今月号から小西徹郎氏の「福島日記」の連載がはじまりました。しかし、今回の大災害が自分の日常生活について見直すよい機会になったことも事実です。私の若い頃にはクーラーなどありませんでしたが、いつのまにか安易にクーラーに頼る生活が当たり前になっていました。いまは、節電を心掛け、出来るだけクーラーなしで生活をしています。しかし、個人はそれでもよいのですが、会で仕事をする人は、そうは行きませんので、暑い時にはクーラーを使っています。今年の夏も暑くなりそうですが、クーラーに頼りすぎず、そうかといって熱中症にかからぬように、健康に気遣いながら、乗り切ろうではありませんか。(編集長：中島洋一)

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

---

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集スタッフ：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光  
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

---

### 音楽の世界7月号(通巻530号)

2011年7月1日発行 定価500円(本体476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: [onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間:5000円 (6ヶ月:2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\* 乱丁、落丁がございましたらお取替えます